

斯波照雄・玉木俊明編  
『北海・バルト海の商業世界』

悠書館、2015年5月刊、四六判、480頁、4500円＋税、ISBN978-4-86582-003-4

西洋史において、北海・バルト海商業圏に関する研究は、地中海商業圏に関する研究に比べ、取り扱われることが決して多くはない。そのような状況を鑑み、『北海・バルト海の商業世界』（以下、本書）は、中世から近世にかけてのこの地域に関する「専門の論文集ではなく、それぞれの専門分野の内容を、歴史に興味を持っている人たちに広く読んでもらおうという趣旨で編まれ」た（4頁）。また、本書の編者の一人である玉木俊明（敬称略、以下同様）は、「序文」において、北海・バルト海が広大な後背地をもつという北方ヨーロッパの自然環境やこの地域の有していた発展可能性をふまえ、北海・バルト海の商業史を研究する重要性を訴えている。以下では、まず各章の内容を紹介し、つぎに評者のコメントを提示したい。

第I章「中世のバルト海・ロシア貿易——ハンザとノヴゴロドの商館交易」（小野寺利行）は、ノヴゴロドのハンザ商館でおこなわれた、ハンザ商人とノヴゴロド商人の商館取引について論じている。ノヴゴロドにハンザ商館が建設される以前、バルト海の東西ルートでの取引の担い手はハンザ商人ではなくゴトランド商人であり、ノヴゴロド商人とゴトランド商人は相互に行き交う交易をおこなっていた。しかし、ノヴゴロドにハンザ商館が開かれると、次第にゴトランド商人との関係においてハンザ商人が優位となり、ノヴゴロド商人のバルト海渡航の減少も相まって13世紀後半に商館交易が確立した。取引の主な商品は、ノヴゴロド商人からハンザ商人へは毛皮と蜜蠟、ハンザ商人からノヴゴロド商人へは毛織物や銀であった。異文化を背景に持つ両者の商館での取引は条約によって細かく規定されていた。それはハンザ商人に有利なものであったが、15世紀になると、取引の場所はリーフランド地方に移り、ノヴゴロド

商人とハンザ商人の取引は対等な立場でおこなわれるものに変容した。

第II章「中世後期・近世のドイツの商業と北海・バルト海」（谷澤毅）は、ドイツにおける北海・バルト海の沿岸地域を「海のドイツ」、内陸地域を「陸のドイツ」として、両者と海とのかわりを、都市間商業を中心に考察している。中世後期より「海のドイツ」の中心であるリューベックは、バルト海と北海を陸でつなぐ中継地点として発展した。しかし、船舶の技術の発達により、荷の積換えが不要となるエーアソン海峡のルートの使用が増加すると、その取引の担い手は主にオランダ商人となり、「海のドイツ」はバルト海内部の狭い海域の商業の拠点という性格へと変化した。「陸のドイツ」としてあげられるケルンは、イングランド商業と深いかわりをもち、また、アントウェルペンから中欧、東欧地域の取引をつなぐ役割を担っていた。エーアソン海峡を経由するルートが主要となると、「陸のドイツ」はバルト海へ進出し、「海のドイツ」とは異なり、世界経済に参入していくこととなった。

第III章「ハンザ都市の商業構造——北海・バルト海における塩とビール」（斯波照雄）は、食料保存に不可欠であった塩と日常生活における廉価な飲料であったビールの生産や取引の変化について取り上げている。14世紀のバルト海地域で流通する塩の多くは、リューベックによってもたらされるリューネブルク塩であった。しかし、15世紀にオランダ商人やイギリス商人がバルト海へ進出すると、フランス西部の安価なペイ塩が流入し、リューネブルク塩の占有率は徐々に低下した。ビール醸造業は、もともと自由な自家醸造が広く行われていたが、次第に都市周辺や近隣地域への輸出目的のものとなった。都市におけるビールに関する間接税は財政上重要なものであり、ビールは輸出商品として都市へ利益をもたらした。17、18世紀になると、コーヒーや紅茶などの飲料が市民の生活へ浸透する中で、それらの植民地物産の流入はビール流通網を通しておこなわれ、北海・バルト海の商業圏の流通ルートは大西洋貿易と結びつくこととなった。

第IV章「交渉するヴァイキング商人——10世紀におけるビザンツ帝国とルーシの交易協定の検討から」(小澤実)は、北ヨーロッパ世界に政治秩序を与えたのはヴァイキングであるとする「ヴァイキングの秩序」という見方を提示し、商人としてのヴァイキングがロシアに「ヴァイキングの秩序」を形成していった過程を論じている。スカンディナヴィア人がその成立に深く関与したとされるキエフ・ルーシは、彼らにとって重要な交易の取引相手であったビザンツ帝国との交渉をおこなう際、文書を通して協定を結んでいた。商人としてのヴァイキングは、掠奪者ではなかった。むしろ彼らは、商業慣行の異なる文書主義国家との交渉をする際、自らの利益の拡大を図るだけではなく、ラテン・カトリック圏とギリシア正教圏の間をつなぐという側面もあわせもった知性ある集団であったのである。

第V章「中世アイスランドの商業——羊毛と女性」(松本涼)は、特に10世紀から13世紀におけるアイスランドの商業を「ヴァズマール」という羊毛布に着目して考察している。ヴァズマールの生産の担い手は女性であった。この羊毛布は14世紀半ばまでアイスランドの海外輸出の商品の中心であり、女性たちは実際に海外へ出かけることはほとんどなかったものの、間接的に海外交易に影響を与えていたのである。しかし、14世紀中頃から輸出品として干し魚が増加することによって、ヴァズマールの輸出量は減少した。生産から輸出の過程すべてが男性の管轄下に置かれることになり、女性の仕事と海外との関係性は弱まった。

第VI章「中世ノルウェーの商業と経済——北方のタラ、ハンザ商館、そして黒死病」(成川岳大)は、中世中頃から末期にかけてのノルウェーの社会・経済の変容について論じている。西ノルウェーの北海沿岸に位置するベルゲンは、12世紀末までには海を隔てた各地から人やモノが集まる場として機能するようになっており、干しダラが主要輸出品であった。14世紀にヨーロッパを震撼させた黒死病はノルウェーにもおよび、特に死亡率が高かったのは貧民やエリート層であった

聖職者であった。黒死病の被害により、政治・経済の両面においてノルウェー社会では変化が生じた。ベルゲンにはハンザの商館が形成され、中世末ベルゲンのノルウェー人はハンザ商人が構築した北海・バルト海のネットワークに組み込まれていったのである。

第VII章「フランドルとハンザ、そしてフランスとハンザ——ブルッへの浮沈をめぐる一つの物語」(山田雅彦)は、ブルッへとハンザ、そしてフランス西部とハンザの関係性を述べている。フランドル地方に位置するブルッへは、商品市場と金融市場という二つの側面を備えた国際中心地であり、13世紀半ばにブルッへに進出したハンザ商人は、ブルッへを拠点としてフランス王国へ進出した。ハンザ商人の進出は主にワインを求めてのことであった。15世紀半ばにはアントウェルペンが台頭し、さまざまな団体・個人がアントウェルペンへ拠点を移す中で、ハンザの商取引の拠点もまたアントウェルペンへ移動し、ブルッへは凋落したのである。

第VIII章「中世ハンザ商人の世界——リューベックを中心に」(柏倉知秀)は、「ハンザの首邑」と呼ばれたリューベックの大商人の一人であるヨハン・ヴィッテンボルクの生涯を足掛かりとして、ハンザ商人の生涯、そしてハンザ商人が生きた世界を描いている。ヨハン・ヴィッテンボルクは、14世紀後半にリューベックの市参事会員および市長として活動していた人物であったが、正確な理由は不明なものの、現在のところデンマーク王に敗北したために処刑されたとされている。当時の裕福な商人は、政治指導者としてだけではなく、戦時には軍事指導者であった。ハンザ商人は、幼い頃から教育を受け、読み書きや算術、ラテン語などを習得した。13世紀以降、ハンザ圏には文書主義が普及し、商業取引のあり方が遍歴商業から定着商業へと変化した。このような時代にリューベックを中核とした広い地域にまたがる商業ネットワークを形成したヴィッテンボルクは、当時のハンザの商人たちの特徴を明らかにする人物であった。

第IX章「近世スウェーデンの都市計画と商業

政策——グスタヴ・アドルフとストックホルムの首都化構想」(根本聡)では、グスタヴ2世アドルフの治世下におけるストックホルムの都市化とその都市としての機能について考察している。都市は行政や経済の点から必要とされており、スウェーデン王国において、都市化は、国王グスタヴ2世アドルフと王国宰相アクセル・オクセンシューナが牽引する国策であった。1600年頃になってもスウェーデン国王や宮廷は王国内を巡回する形態をとっていたが、都市化が進むなかで、以前から首都とされていたストックホルムに国王は所在地を置き、王国の中心的な国家行政機構も集められた。ストックホルムは、「都島」「北都」という二つの都市が競争するなど問題があったが、その二つの都市は融合され、国家権力によって都市の機能が強化された。

第X章「知られざる海洋帝国の姿——近世デンマークの海峡支配と国際商業」(井上光子)は、北海とバルト海のつなぎ目に位置するデンマークが、その位置の条件ゆえに発展させた国際商業について論じている。北海・バルト海の二つの海をつなぎ目に位置し、また北欧諸国の中で唯一西欧と地理的に直結している点においてデンマークの所在は特異である。陸に囲まれているバルト海の玄関口であるエーアソン海峡は、近代までデンマーク支配領域として黙認されており、デンマークによって海峡を行き交う船舶は通行税を徴収された。この通行税は、デンマーク国王の采配に委ねられ、税収はすべて王室金庫に入れられたため、デンマーク王国の発展の一助となった。また、デンマークは多くの貿易会社を有し、北海・バルト海に限らず、世界中の海で交易した。アメリカ独立戦争を契機に、中立国という立場ゆえに絶好の機会を得たデンマークは、バルト海向けに植民地物産を多く輸入し、コペンハーゲンを経由して再輸出するという中継貿易によって繁栄した。

第XI章「中世後期から近世における陸上交易の発展と北海・バルト海の世界」(菊池雄太)は、これまでの章で扱われてきた海から視線をはずして、陸地での交易に目を向けている。海上輸送には、冬季の凍結した海での航海の危険性や、戦時

における海上ルートへの制限など、制約が少なからずあった。そのため、陸上交易の利用が好まれることがあり、鉄道のない時代において河川は内陸における唯一の大量輸送手段であった。陸上交易は北海・バルト海の商業世界と結びつき、海上で輸送されたさまざまな商品は河川や運河を通過して内陸世界にもたらされた。河川のネットワークは、ドイツ国内に止まらず、現在のオーストリアやチェコまで及んでいた。

第XII章「近世のイギリスと北海・バルト海・大西洋の商業関係」(玉木俊明)は、近世イギリス帝国と北海・バルト海との関係性や、イギリス帝国における大西洋経済の拡大について論じている。近世のイングランドは、アントウェルペンを通してヨーロッパ経済と結びついていた。イングランドは主にアントウェルペンへ未完成の毛織物を輸出し、アントウェルペンで完成品となった毛織物はヨーロッパ各地へと輸出された。しかし、西欧以外の地域に市場を求めたイングランドは、次第にアントウェルペンの影響下から離脱し、完成品となった毛織物を輸出するようになった。バルト海地方は、イングランドにとって完成品の毛織物の輸出先であったが、17世紀後半以降になると原材料、主に造船資材の供給地域へと移行した。その中でもイギリスの貿易相手として台頭したのはロシアである。ロシアから大量の造船資材がイギリスへ輸出され、特に鉄はのちの産業革命にて使用された。18世紀後半になると、イギリスにおける大西洋経済の比率は上昇し、西アフリカの奴隷によって生産された砂糖が最大の商品であった。

最終章である第XIII章は、「近世オランダのバルト海貿易——母なる貿易」(玉木俊明)である。オランダにおいてバルト海交易は「母なる交易」と呼ばれている。16世紀後半から17世紀前半は、食糧危機と森林資源の枯渇という二つの危機から、バルト海地方が重要な地位を占め始めていた。16世紀半ばから17世紀中頃までは「穀物の時代」と呼ばれ、主にポーランドからアムステルダム商人を通じて穀物が輸送された。17世紀後半から18世紀は、ポーランドからスウェーデ

ンにバルト海地方の経済的中核がうつり、造船資材を中心とする「原材料の時代」となった。そして、「原材料の時代」にはイングランドが台頭してくるが、バルト海地方においてよく使用されたのは依然としてオランダ船であり、海運業においてオランダの優位は明白であった。またロシアとの貿易において、オランダの銀行はさまざまな国において利用された。18世紀オランダ経済にとって、最も重要なものは穀物輸送、金融、情報であり、それらを支えたバルト海交易は紛れもなくオランダの「母なる交易」だったのである。

以上の内容紹介から見てとれるように、本書は12人の著者からなる論文集という面をもつが、全体として一貫性が保たれている。本書の読者は、「それぞれの論文を結びつけることで、ハンザを中心とする巨大なネットワークの存在をおぼろげながら認識されることであろう」（12頁）と本書で述べられているように、北海・バルト海地域の商業のつながりや、その内外の地域との交流を垣間見ることができよう。

本書で取り上げられている地域を地図上におこしてみるとその特徴は明らかである。東はノヴゴロドをはじめ、ルーシと交易したビザンツ帝国にまで言及され、西はイングランドやアイスランドを超えて大西洋の植民地との交易まで論じられている。ポーランドなどのバルト海南岸東部や中央ヨーロッパに関して独立して述べられる章はないものの、第XIII章を代表とするアムステルダム商人による穀物輸送や、第XI章におけるライプツィヒやドレスデンについての節など、本書のいたるところでそれらの地域は言及されており、北海・バルト海地域がヨーロッパ内陸まで交流をもっていたことが示唆されている。このように、中近世における北海・バルト海の商業圏は、その沿岸地域を越え広大な地域に及んでいたことがわかる。

ここで「序文」に立ち返りたい。ここで、玉木は、地中海と北海・バルト海の自然環境についてまず述べている。地中海に比べ、北海・バルト海は大きさ、深さともに小規模である。しかし、後背地に目を向けると、その立場は逆転する。玉木は後

背地の広さの違いに加え、主権国家が北方ヨーロッパにおいて主に発展したということから、経済制度の面からみても、将来的な発展可能性はむしろ北方ヨーロッパにあったと述べている。この後背地の広さは、北海・バルト海の商業を語る上でひとつのテーマである。第XI章で、河川や運河を通して、ハンザの陸でのネットワークが低地地方から中央ヨーロッパまで広範囲に広がっていたことが見てとれる。また第III章では塩とビールの流通について、そして第VII章においてワインの流通について論じられている。特にビールの生産、輸出については都市の周辺部との関わりが強調される。自家醸造であったビールは次第に都市周辺への輸出を目的としたものへと変化した。植民地物産がヨーロッパに流入すると、それらはビールやワインの流通網を利用してヨーロッパ各地に浸透した。広大な後背地と、そこに張り巡らされたネットワークは、ヨーロッパの人々の生活水準を向上させ、多様な地域をつなぐ役割を果たしていたのである。このようにヨーロッパの商業を語る上で、北海・バルト海の後背地は言及する価値のあるテーマであるということができる。

しかし、ここで語られる地中海地域と北海・バルト海地域の後背地の規模の比較は、視野がヨーロッパ文明圏に限られているという点で問題がある。地中海地域は、大航海時代に新航路が発見される以前から、アフリカやインド洋世界、そしてアジアとも交流し、つながりをもっていた。地中海地域、そしてその交易ネットワーク圏には、そのような他地域からのさまざまな人間たちが行き交い、多くの物産が流通していたのである。「序文」では北海・バルト海地域の商業を研究する意義を強調するためにも、その後背地や自然環境という点でこれまで多く研究されてきた地中海地域に北海・バルト海地域が勝る例を提示したのであろう。だが、上記のことから、この点においては一概に北海・バルト海地域の優位を語ることはできないはずである。

北海・バルト海の商業圏はヨーロッパ文明圏に止まらず、異文化世界にまで広がっていた。第IV章では、従来掠奪者としてみなされることの

多いヴァイキングが、ビザンツ帝国との交易を通して、カトリック圏とギリシア正教圏を結びつけたことをうかがわせる。また、第I章でも、ハンザ商人とノヴゴロド商人、つまりカトリック教徒とギリシア正教徒との交流が描かれている。この二つの章からわかるように、異なる文化圏を商人が行き来し、両者をつなげていたことを通して、今まであまりスポットライトを当てられてこなかったこの時代の北ヨーロッパと北西ユーラシアの関係が見えてくるだろう。

個の商人に目を向けた第VIII章では、ハンザ商人が政治面や軍事面においても活躍し、商業においては独自のネットワークを形成したことが明らかにされている。この時代の商業は国家を超え、商人たちのネットワークによってまわっていたのである。また、第V章においては、本書のなかで唯一であるが、女性と海の関わりについて論じられている。14世紀以前の北海・バルト海世界において、女性がどのように商業に関わっていたか論じられる機会は少ない。このため、ここではアイスランドという孤島の女性について論じられているが、その他の地域の女性と商業の関係性について考察する際にも重要な論考になるであろう。

北海・バルト海の商業について語るとき、エーアソン海峡についての言及は避けて通れないものである。この海峡は航海の難所とされており、船舶や操船の技術が発達するまで、バルト海沿岸地域から北海沿岸地域へ運ばれる商品はユトランド半島の付け根を通るしかなかった。これは、第II章において「海のドイツ」としてあげられたリューベックが台頭したことのひとつの要因である。しかし、エーアソン海峡における貿易船の運行が可能になると、オランダの商人がバルト海に進出し、オランダとの穀物輸出を通じて、バルト海地域は世界経済に組み込まれることとなった。第X章で述べられているように、デンマークはエーアソン海峡の通行税によって国庫が潤い発展した。そしてアジアやアメリカ大陸で植民地を獲得し、貿易を拡大させた。第IX章においては、ストックホルムの都市化について論じられているが、こ

の都市化は隣国デンマークを凌駕しようとしたために進められたと考えられる。この二章では、北欧の二国が異なる手段をもって近代化していく様子が描かれている。また、第XIII章においては、オランダのバルト海貿易が、オランダの17世紀のヘゲモニー獲得の中核となっていたことが論じられている。そしてバルト海地域がオランダへの穀物供給の場から、イギリスへの原材料の供給地へと変化したことにも触れられている。イギリスは、第XII章で述べられているように、もともとアントウェルペンに毛織物を輸出する貿易を行っていたが、バルト海地域の原材料がイギリスへもたらされ、それらは産業革命を支えることになった。読者はこれらの章を通して、エーアソン海峡の通行をひとつの契機にして、バルト海地域が世界とつながったことをうかがい知ることができるのである。しかし、このような歴史を見てみると、バルト海地域は強国への物資の供給地としての機能しかもっていなかったように思われるが、本書においては多くの論考で、バルト海地域にアジアやアメリカ大陸の物産がもたらされたことについても論じられている。バルト海地域にそのような物産が流通することによって、人々の生活が多少なりとも豊かになったことは、バルト海地域が世界のネットワークに組み込まれるイメージをより強くさせるものであろう。

本稿のはじめに述べたが、現在の日本の歴史学研究において、北海やバルト海といった北方のヨーロッパの海について論じられることは多くはない。2011年にデヴィッド・カービー、メルヤ＝リーサ・ヒンカネン著『ヨーロッパの北の海：北海・バルト海の歴史』（玉木俊明監訳、刀水書房）が出版された。この本は、北海・バルト海について研究された大著であり、取り扱う時代が広く網羅的であるという特徴をもつ。それに比べ本書は、現在活動している研究者を念頭に置いて編まれた論集であるため抜け落ちる問題もあるが、特に中世後期から近世にかけての個別の地域とそこに関わる諸地域や諸事象について専門的な知識を与える、日本で初めての書物である。そのため本書が北海・バルト海地域について研究する者、関心が

ある者にとって重要な参考文献となることは明らかである。本書の出版を契機として、この分野の研究が日本においてより進められることを期待したい。

(道越奈苗)

## 坂本優一郎著 『投資社会の勃興

財政金融革命の波及とイギリス』

名古屋大学出版会、2015年2月刊、A5判、496頁、6400円+税、ISBN978-4-8158-0802-0

本書は、2001年から2011年にかけて発表された諸論文をベースに、大幅な加筆修正を経て完成された近世イギリス社会経済史の大著である。著者は、一次史料を駆使して、イギリスが18世紀後半から19世紀始めにかけて、国家に対する信用が「経済だけではなく、政治、社会のあり方に決定的な影響」をおよぼす社会へと変貌していく様子を詳細かつ説得的に描き出した。こうした「投資社会」の深化と拡大は、従来ほとんど注目されてこなかったが、近代社会の形成にとって不可欠であったとして、その重要性が強調されている。

本研究の主たる特徴として、次の三点を挙げておきたい。第一に、本書では政府公債の発行に関わった政治家や外国人公債請負人から、巷の一般投資家に至るまで、公債その他の投資に参加した幅広い人々の実態解明に力点が置かれている。このため、経済史研究でありながらも、読者が数式の羅列に悩まされることはないだろう。著者の説明によると、こうしたアプローチは近年の研究動向に沿うものである。

第二に、「投資社会」の勃興とその拡大について、他国との関連性が強く意識されている。特にイギリス公債の大量発行におけるオランダ資金の役割については、多くの頁を割いている。評者としては、かつて著者の師である川北稔がアリス・カーターの研究に注目して、オランダの対イギリス投資の重要性を強調していたことが思い起こされる。このほか本書では、合衆国や植民地アイ

ランドの例を挙げて、「投資社会」の国境を越えた拡大、言い換えれば、各国政府が公債発行による資金調達を試みるなかで、一つの大きな「投資社会」——各国の信用を比較検討し、取捨選択して、資金を提供する場——に取り込まれていく様が語られる。

第三の特徴は、本書が史料の発掘に基づく手堅い実証研究でありながら、同時に一つの時代像を確立しようとしていることである。18世紀後半は、関連史料が必ずしも豊富とは言いかねる時代であるようだが、そうした制約にもめげず、時に断片的にならざるを得ない実証の成果を通じて、近代化に深く関わる「投資社会の勃興」を浮かび上がらせようとする著者の姿勢は、大変意欲的である。

本書は（序章と終章を除くと）四部構成となっており、第一部（1章、2章）が「投資社会」の政治面を、第二部（3章、4章）が社会面、第三部（5章、6章）は文化面、第四部（7章～9章）は経済面を扱っている。以下では各章の内容を簡単に紹介し、若干のコメントを記す。第1章および2章では、ホイッグ寡頭政と反対勢力との政治抗争を軸に、急増する戦費の調達手段として「限定請負制度」、すなわち少数の公債請負人による引き受けが大量の公債起債を可能にする構造として世紀半ばに確立し、その後有効に機能した経緯が詳細に（時に生々しく）語られる。公債の発行を支え、政府と密接な関係を保持した公債請負人集団が初めて特定されるとともに、その半数を占めた外国人の役割の重要性が示される。なかでもオランダ人は、ファン・ネック兄弟を筆頭に、国際的な人的ネットワークを通じてオランダから豊富な資金を引き寄せた。「投資社会」の発展に深く関わったファン・ネック家については、その後もたびたび取り上げられる。

第二部は、膨大な債券を保有した多様な人々に光を当てている。第3章は「投資社会の最上部」に位置したファン・ネック兄弟とその家族について、遺言状を手掛かりとして彼らの国際色豊かな私的、社会的、ビジネス・政治上の人間関係とその変遷を重層的に描いている。なお、同章には小

さな事実誤認があったので、確認できた箇所のみ、ここで指摘しておく。コルネリウス（コルネリス）・ファン・ネックの妻は「ド・フロフ」ではなくド・フレーフ de Greeff、その子ランベルトは「ホラント州のペンシヨナリ」ではなく、ロッテルダム市の法律顧問 Pensionaris<sup>(1)</sup>（1736-45年）である。なお、彼の洗礼日は1696年11月18日であるので、ヨシュアが1702年生まれ（p.143, 図3-2参照）であるなら、ランベルトはヨシュアの兄であり、「次男ヨシュア」との表記は誤りということになる。

第4章では、「中層部から下層部に位置する」小口投資家を取り上げられ、その構成、証券の流通経路、投資の目的が明らかにされる。「投資社会」の拡大が、上流から中流層へ、また女性の比率向上という形で進んだとの結論は説得的である。ただし、その拡大が労働者層にまで及んだとする主張は、やや早急であるように感じられた。主張を裏付ける唯一の証拠は、港町ハリッジの富くじ（1757年）購入者30名中、4名が労働者だったという断片的な手掛かりに過ぎない。さらにこの4名についても、職名だけで労働者と断定するのは難しい。外科医（2口）や宿屋の経営者（3口）より多い4口を購入した「漁師」が本当に労働者なのかは疑問の余地がある。

第三部では、イギリスにおける「投資社会」の発展を同時代人がどのように受け止めたのか、という問いが提示され、投資に関する主観的評価や客観的認識の有り様とその変化が語られる。第5章は、同時代人トマス・モーティマとイサーク・ド・ピント（オランダ人）の著作を取り上げ、国家の信用に対する評価に焦点を当てて、「投資社会」の否定から現実に基づく肯定へと向かう1760年代以降の流れを追う。第6章は、科学の発展と「投資社会」との「共棲関係」を明らかにする。人口統計学や確率論の発展によって、様々な年金債 annuity が科学的根拠に基づいて設計、発行され、また購入された。その一方で、各種の年金関連データは学問へとフィードバックされた。

第四部は、国内外の様々な経済的側面を扱う。18世紀後半から19世紀始めにかけて、イギリス

各地の都市とその近郊では、橋梁、街路、広場、公共施設、上下水道網などが、都市間には運河や有料道路が、海港では各種港湾設備が整備され、これらの社会的間接資本がイギリスの近代化や工業化を支えていく。第7章は、それらの整備費用を調達する手段として各種証券が担った役割に光を当て、拡大を続ける「投資社会」と近代化との深いつながりを指摘する。大変充実した内容であるが、強いて言うなら、運河・有料道路について多く語られていない点がいささか残念であった。

第8章は「投資社会」の地理的拡大という観点から、アイルランド財政の変化を追う。70年代のアイルランド政庁は、膨大な軍事費負担に苦しんだ結果、地元のみならず、ロンドンを通じてイギリス本国や諸外国の幅広い投資家から資金調達することで財政破綻を免れた。こうして同植民地が「宗主国を中心とする投資社会を空間的に押し広げ…アイルランド全域に債券保有者を生み出した」（p.333）とする結論は説得的である。

第9章は、公債発行の政治的経緯や公債請負人の役割が語られた第一部に対応する内容で、どういった外国人が、どの程度のイギリス公債をどのようにして引き受け、どれだけの利子・配当を得たのか、という問題を包括的に扱っている。そのなかで、オランダ資金の重要性が再びクローズアップされ、ファン・ネック商會を始めとする外国人公債請負人の取引が詳細なデータとともに描かれる。なお、終章は、これまでの議論が分かりやすくまとめられているので、分厚い本書の内容を再確認する上で役立つだろう。

著者は、「投資社会」の発展を描く上で、考察対象をイギリスに限定せず、オランダやフランス、アイルランド、合衆国を含めた幅広い議論を展開している。その上、専門的なテーマを読みやすい文章で分かりやすく論じており、本書は、広く欧米史全般に関心を抱く方々に大きな知的刺激をあたえるにちがいない。また、専門家に対しても、イギリス史やオランダ史に限らず、多くの分野の歴史家が参加できる議論の場を提供したといえる。本書ではフランスが「投資社会」に加わっていく経緯についてはあまり触れられていないの

で、評者としては、フランス史家の方々からコメントを伺いたいところである。

本書について評者に不満な点があるとすれば、それは「投資社会」の概念と歴史的位置づけに関する曖昧さである。そこで、後半はこの問題についてコメントしておきたい。序章の説明によれば、「投資社会」とは「近世末期に誕生し現代まで拡大し続けているひとつの社会のあり方」(p. 9)である。近世末期(343, 375 ページの表現では近世最末期だが、おそらく同じ意味)とは、18 世紀後半を意味する。このことは、例えば「近世最末期のヨーロッパ世界において、投資社会の形成を促進し、資金の流動化をもたらしたのは戦争であった。なかでも七年戦争はその最も重要な契機となった」(p.376) という文章や「…オランダの投資家を、一八世紀後半のイギリス・オランダの二国間関係だけではなく広く近世末期の欧米世界に位置づけることで」(p.344) といった箇所から明らかである。したがって「この投資空間の誕生によって『イングランド財政金融革命』という一七世紀末の出来事は必要条件であった」(p. 343) もの、同革命は「投資社会」の誕生そのものを意味しないはずだ。ところが、344 ページには「一七世紀末、イングランドは投資社会の誕生と同時に国外からの投資を受け入れた」と書かれている。これでは、投資社会がいつ誕生したのか、読み手に伝わらない。

そこで、我々は手掛かりを求めて「投資社会」の定義を参照することになる。9 ページには「投資社会」について二種類の定義が記されている。一つ目は「簡単」なバージョンで、「証券を売買し、保有し、利子や配当を得る行為が存在する社会のこと」である。この内容は、多くの時代や国・地域に該当する広い定義であるように思われる。著者によれば、「投資社会」は「近世末期に誕生し現代まで拡大し続けている」ので、同定義は近世末期以前に適用できないことになるが、説得的ではないだろう。

本書によれば、「投資社会」には「歴史的な淵源」(p.343) と呼ばれるものがあつた。もっとも古い「源流」(p.375) である中世のイタリア都市

国家のほか、「一三世紀から一六世紀にかけて…フランス、一七世紀のアムステルダムやロッテルダムを中心とするオランダ」(p.343) が該当する。これらを「淵源」たらしめている要素とは何だろうか。ヒントは次の一節にある。「近世最末期のイギリスで観察される投資社会は、中世のイタリア諸都市でみられる公債保有者集団とはまったく異なる社会である」(p.384)。つまり、中世イタリア諸都市は、公債保有者集団が存在するが故に「源流」であり、「淵源」なのである。だとすれば、イタリア諸都市は(おそらく中世フランスや近世オランダも)、簡単なバージョンの定義を満たしているのではないだろうか。この定義では、投資社会の誕生時期を特定できない。

そこで次に、六つの構成要素を列挙した詳細なバージョンを検討してみたい。以下に該当箇所を引用する。

第一に、個人が証券投資によってマネタリな関係をとり結ぶ。第二に、こうした個人の証券への投資をもとに政治・経済・社会上の諸制度(国家・株式会社・社会的間接資本・投資組合など)が構築される。第三に、事業設計や事業への投資は、学知が正しいと認めるかぎりにおいて、誰の目にも明らかかなように「客観化」されるとともに専門家から評価され、貸し手、借り手、第三者に、予測可能性が付与される。第四に、証券への投資、あるいは一定の投資の様式が、社会的に承認される(投資と投機の峻別)。第五に、社会空間の構築や制度の設計・実施リスクが、「証券」を発行し、かつ、それに投資されることにより分散する。第六に、投資家がそのリスクを引き受け、リスク引き受けの対価として金銭的な利益、すなわち、利子や配当を得る。本書では、これらの要素がすべて、あるいはその多くがみられる社会を投資社会とみなす。

この定義に記された第二の要素には第7章で扱われた社会的間接資本が含まれている。また、第三の要素は第6章の内容に、第四の要素は第5章に対応しており、各章で扱われた時期を考えれば、

投資社会の誕生が18世紀半ばであることがわかる。とはいえ、この定義も、簡単な定義と同様に、一八世紀半ば以前の社会を必ずしも排除しないという問題をはらんでいる。

第一の要素は簡単なバージョンの定義に重なる内容であろうし、それ以外の要素についても、第二、第三、第四の要素は一七世紀あるいは一八世紀前半のオランダに該当する可能性を否定できないように思われる。例えば、著者も認める通り、ホラント州は一七世紀の時点ですでに公信用を確立しており、富裕民はもちろんのこと「うだつの上がない職人や村の住人、そして常に多数の女性」たちが少額の公債を購入していた<sup>(2)</sup>。また、一七世紀後期に結ばれたトンチン契約は二〇〇件近くを数えたという<sup>(3)</sup>。ちなみに第五の「社会空間の構築や制度の設計・実施」は具体的に何を含むことになるのか、評者にはイメージできなかった。オランダの投資社会の実像については不明な点が多く、詳細は今後の研究を待たなければならないのだろうが、「投資社会」は定義上、六要素の「すべて、あるいはその多く（傍点は評者）」がみられる社会であるため、このようなオランダ社会を「投資社会」と質的に異なるものとして区別することは難しいのではないか。実のところ、評者は一八世紀後半を（「淵源」とは異なる）近代的な投資社会の始まりとすることに反対するつもりはないのだが、本書が一八世紀半ば以前と以後とを明確に区分する以上、一八世紀後半の発展が時代を画する理由、言い換えれば、著者が考える近代の意味をさらに説明する必要はあるだろう。

#### 註

(1) 法律顧問とは、都市行政府の官職である。市参事会には顧問として出席し、助言を与えた。通常は、州議会において都市の代表も務めた。

(2) J・ド・フリース、A・ファン・デア・ワウデ著『最初の近代経済——オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815』(名古屋大学出版会、2009年) 104ページ。なお、英語版オリジナルの発行年は1977年ではなく1997年である。

(3) Oscar Gelderblom and Joost Jonker, 'With a view to hold: The emergence of institutional investors on the Amsterdam securities market during the seventeenth and eighteenth centuries', in Jeremy Atack and Larry Neal (eds.), *The Origins and Development of Financial Markets and Institutions: From the Seventeenth Century to the Present*, Cambridge University Press, 2009, p.91.

(大西吉之)

#### 南直人著

#### 『〈食〉から読み解くドイツ近代史』

ミネルヴァ書房、2015年3月刊、四六判、304頁、3500円+税、ISBN978-4-623-07279-8

日本の歴史学に社会史が大きなインパクトをもたらしてから、すでに40年以上の年月が経過した。民衆の日常生活は、歴史学の主要なテーマとして定着し、近年では細部に注目だけでなく「グローバルヒストリー」の動向とも関連させながら、マクロな歴史的動態とミクロな様相との接続を試みる、スケールの大きな研究が続々と現れている。人間の生活から切っても切り離せない「食」は、以上のような研究動向において、格好のテーマとなるはずである。しかし依然として、一般書こそ増えてきたものの、研究対象としては扱われることが少ない。こうした状況のなかで、長年にわたり西洋史における食の歴史・食文化研究を牽引してきた先駆者のひとりが著者の南直人である。本書は著者の本来のフィールドであるドイツを対象に、食と歴史の関わりを追究した労作である。以下、本書の内容を紹介したうえで、評者のコメントを加えたい。

本書は、3部構成で全8章から成っている。序章「ドイツの食文化形成の基盤——食のマクロヒストリー」では、食のあり方が歴史的に変化していく前提を16世紀にさかのぼって概観している。大航海時代に生じた「コロンブスの交換」(クロスビー)が、「旧大陸」に一方的に有利な不等価交換であったことは周知の事実である。この「交換」によって、「新大陸」の非ヨーロッパ世界は、

疫病の到来などによって大きな被害を受ける一方、ヨーロッパは非ヨーロッパ世界の産物から大きな利益を得た。そのひとつが、アジア・アフリカ世界からの新しい食物の流入であった。著者は、これによりヨーロッパの食物体系が18・19世紀にかけて大きく変容したことを重視し、具体例として、ジャガイモ、コーヒー、トウガラシを挙げる。くわえて、ヨーロッパ人は、ヨーロッパの動植物を持ち込み、新大陸を西欧の食料供給地としていく。以上のように、大航海時代を出発点として17世紀から20世紀にかけての資本主義的近代世界システムが変化するなかで、ドイツがいかなる位置を占めていたのか、という問題を食を切り口にして論じるのが本書の目的である。

まず、第1部「コーヒーとジャガイモからみたドイツ近代史」では、食物自体に着目し、国民国家成立以前の、世界システム論でいうところの「中核」からややはずれた位置にあったドイツにおける新しい食物の受容過程が描かれる。

第1章「ジャガイモとドイツ啓蒙主義」では、18世紀末以降に普及するドイツでのジャガイモ栽培を取り上げ、その普及プロセスを紹介している。現在では、ドイツ料理の代表格とみなされるジャガイモだが、そこへいたる流れは直線的なものではなかった。やせた土地でも育つという利点を持つジャガイモは、まずファルツやフォークトランドといった、低い山が連なり穀物生産のふるわない地域で普及した。逆に穀物栽培に向けた肥沃な土地での受容は緩慢であり、地域差が大きかった。くわえて、ジャガイモの形態や劣等食物のイメージによる偏見、三圃制等旧来の農耕地利用への参入が困難であったこと、そして農民の知識の欠如といった文化的要因から、ジャガイモはせいぜい貧民のための救荒食物の地位を越えることがなかった。こうした普及の阻害要因の克服に一役買ったのが、18世紀末から19世紀前半にかけての民衆啓蒙主義者による働きかけであった。彼らは、農業発展に向けた活動の一環として、民衆にジャガイモに関する知識を普及させようと、小冊子類を用いた啓蒙活動を行なった。そこではジャガイモの性質、栽培方法、作物・食料として

の利点などが紹介され、偏見の克服を訴えた。ジャガイモは、飢饉や穀物価格の下落といった危機からの脱出口として注目されるようになり、耕地制度の転換と軌を一にして、穀物生産と共存する形で導入が図られる。かくしてドイツは、19世紀末に世界最大のジャガイモ生産国へと成長したのである。消費面でもジャガイモは、19世紀前半に穀物と並ぶ栄養源として定着し、ドイツ国民にとって最重要の食物となる。さらに、食材としてだけでなく、ジャガイモを原料とした蒸留酒の製造など、利用の幅は広がっていった。文化的には、劣等食物という偏見が払拭され、19世紀末には市民向け料理の食材として利用されることに違和感がなくなった。ただし本章では、ジャガイモ消費の階層差は縮小したが、マイン川を境として消費量の地域差は残存していることにも注意が促される。

第2章「コーヒーとドイツ帝国」では、コーヒーを題材に、そのドイツへの導入と「国民的」飲料となるまでの過程が描かれる。オスマン帝国経由でヨーロッパに紹介されたコーヒーは、消費対象にとどまらず、コーヒーハウスという公論形成の空間を生み出したことでも有名である。ドイツでのコーヒーの普及は、1720年代から中葉にかけて、北・中部ドイツの市民層に飲用習慣が定着したことに始まる。ジャガイモと同様に、普及には地域差があり、南ドイツへは一世紀遅れで普及した。しかし、ドイツは植民地を獲得した英仏蘭と異なり、自前供給が困難な状況であった。その意味でコーヒーは、「植民地からの富の取奪競争に参加できなかった中・東欧地域において、どのように植民地物産が受容されていったのかを研究する格好の材料」(49頁)である。18世紀後半のドイツ諸領邦では、重商主義の見地からのコーヒー禁令が出された。このことは、コーヒーの需要を抑えたわけではなく、チコリコーヒーに代表される代替品の生産につながった。ドイツでは、代用コーヒーの消費量が「純正」を上回る状況が、18世紀以来200年もの間続いたのである。19世紀後半になると、ブラジルのコーヒー生産の増大によって状況が大きく変わる。従来英蘭中心の貿易構

造の変化により、独自の関税政策を維持し、自由港として開発されていたハンブルクに参入の余地が生まれた。この都市はブラジルとのコーヒー貿易の拠点となり、ドイツでも国内への潤沢な供給が可能になったのである。国内への供給構造の変化は、社会的受容の進展をもたらした。コーヒーは、「市民的」飲料として、作法にのっとり「正しく飲む」ことが市民的なハビトゥスとして認知された一方、労働者層にもパンと合わせて安く満腹感を得るための飲料として受け入れられた。第一次大戦前の1910年前後がコーヒー消費の最盛期となるが、その後の大戦等の政治的混乱期に供給量が激減するなど、変動を繰り返した。1950年代以降は、平均供給量がすさまじい伸びを示し、コーヒーは「国民的」飲料として定着するにいたる。

第II部「都市化と工業化のもとでの食生活の実態」では、食生活全体を取り上げ、19世紀の工業化と都市化により、食のあり方が変容していく過程が描かれる。

まず、第3章「都市化と工業化にともなう食生活の変化——飲用ミルクを例として」は、近代的科学技術の産物としての食品誕生の歴史が描かれる。その際に著者は、19世紀に生じた、三つの革命（農業革命・輸送革命・保存革命）が、安価で大量生産される加工食品を生み出し、新たな流通システムを通じて消費者に大量供給されることになる、というトイテベルクのテーゼを援用し、加工食品としてのミルクを事例に取り上げる。工業化以前のミルクといえば、飲料ではなくヨーグルトやバター等の加工品であったが、工業化・効率化にともない1870年代に近代的酪農業が成立したことで供給量が増大し、20世紀初頭には乳製品供給のピークを迎える。大都市では、19世紀中葉以前からミルクの供給が始まっていたが、第一次大戦前夜には、地域差こそあるものの、飲用ミルクが十分に供給できる状況が出現していた。流通の大部分を担ったのは、大都市在住の商人であった。彼らの大半は経営基盤の脆弱な零細商人であり、都市下層に属する社会的集団であった。流通をめぐっては、宅配と店頭販売に大別さ

れるが、20世紀初頭には店頭販売が拡大する傾向があった。その背景として、衛生・偽装問題に対する公権力による食品流通規制の存在が指摘される。こうした規制は、地域単位で様々な形で現れたが、外見上・味覚上異常なミルクと病気にかかった家畜のミルクの流通を禁止したところに共通点がある。こうしたミルクの取り扱いをめぐっては、都市ごとに細かな規定と検査体制が整備された。規制強化にともない、零細商人とは対照的でボレ社に代表されるような、自前で衛生管理ができる大規模な販売企業が出現し、大衆的食品としてのミルク消費を支えることになる。

第4章「家計調査からみた食生活の実態」では、実際の食生活のありようについて、消費面から検討される。その際に史料として利用されるのは、消費サイドからの二つの家計調査である。具体的には、帝国統計局による「低所得家庭家計調査」（1907年）とドイツ金属工組合による「金属労働者320家計の調査」（1908年）が、十分なサンプル数と家計簿に基づく信頼できるデータを提供するものとして使用される。著者は、これらの調査には対象の社会階層や地域的分布に問題があることを認識したうえで、ドイツ人労働者層の食生活の実態に迫る。それによると、食物摂取量は世紀転換期において2600～2800キロカロリーと、かなり改善を示していたとされる。さらに本章では、国や地域による食物摂取量の差にも考察が及んでいる。ドイツ内部でも、北・中部では18世紀以降食文化が革新されていくのに対し、南部は「後進地域」を形成した。こうした地域差は第一次大戦後の数量的研究においても、ジャガイモや肉類の消費動向とも重なっている。他国との比較では、イギリスの労働者の食物摂取量に関する研究をもとに、ドイツと比較して食生活が相対的に貧弱であったことが指摘される。ただし、イギリス側の史料が最下層の労働者を対象としていることや、英独にみられるちがいはそれぞれの食習慣のちがいを反映している可能性があるため、各国の食文化の地域差を考慮した研究の必要性が展望される。

以上の第II部では、「モノ」の側面から、ドイ

ツの労働者のなかで「近代的食生活」が定着していく過程が描かれてきたが、第 III 部「科学化」「規律化」する食の世界——近代国民国家ドイツと食の言説」では、食にかかわる科学やイデオロギー等の「形而上的」側面が検討される。

第 5 章「国民統合と食の世界——政治に利用される食の科学と食の教育」は、19 世紀に成立した学問分野としての栄養学が近代国民国家の形成と密接にかかわっていたことを明らかにする。国民国家では、国力の観点から国民の健康増進に配慮し、食生活を合理的に説明する原理としての栄養学の確立が求められた。19 世紀前半には、食物・栄養分野において、人体・健康を個別要素・機能に分解し、分析的に把握するというパラダイム転換が起こる。さらに世紀後半には、三大栄養素やカロリー概念の提唱に例示されるように、栄養生理学的研究を基盤に人間に必要な平均栄養量を算定する栄養学の学問的地位が確立する。ここに、従来の食養生学が栄養学へと脱皮し、近代的な食の科学が成立した。専門的学問分野としての確立は、国民国家ドイツの形成過程と重なるかたちで展開し、学術雑誌、専門家の全国団体、資格試験制度が前世紀転換期に整備されていった。栄養学は、労働者を「健全化」し国家へ統合するというドイツ帝国の課題を下支えし、労働者家庭に対する食教育の基盤を提供した。カレに代表されるように、市民的自由主義に立脚した家政教育が実施され、雇用者側の論理に沿うかたちで、栄養学的知識を用いて労働者に生活改善を求めた。ここでは、家庭における主婦の役割が重視され、食生活・料理教育が中心に据えられた。公教育では女子労働者を対象にした食教育は進展しなかったが、民間分野では定時制の講習会を中心に労働者層への食教育が積極的に展開された。労働者にはどんな食が望ましいと考えられていたかを知るうえで有益な史料として紹介されるのが、『家庭の幸福』である。19 世紀末に爆発的な売れ行きを示した本書は、料理教育に重点をおいた女性労働者のための平易な家政教育用教科書である。ここでは、ほとんどが安価な材料で容易にできる料理が紹介されていた。こうした栄養学を基盤にした

食教育の根底には、「正しい」食教育をおこなえば労働者層をめぐる諸問題は解決する、という論理が働いていた。

第 6 章「食の安全を保証するために——食品偽装問題と食の「規律化」」では、食品偽装や食の安全に対する監視体制の形成過程に注目し、食生活のあり方と国家・公権力との関係を考察している。19 世紀のヨーロッパでは、新食品の浸透、加工食品の出現、食品販売の急拡大、伝統的食品手工業による規制力低下など、食をめぐる状況に大きな変化が生じるなかで食品偽装問題が新たなかたちで顕在化する。ドイツでも 19 世紀中頃から偽装事例の告発や検査方法の紹介が見られたが、世紀後半にはより深刻化した。食品偽装は人的資源の再生産に脅威を与えかねないという点で、国家や社会にとって重大な意味を持ったため、公権力による食品監視システムの構築が始まる。帝国レベルでは、「食品・嗜好品・日用品の流通に関する法」(1879 年)によって、国全体で食品流通に対する公権力の介入が法的に保証されるが、実効性において不十分であったほか、安全性を判定する基準をめぐり、基準を強化したい食品化学者と業界利益の確保を求める食品産業界との間に対立が生じた。行政当局は両者の間に立ちながら、監視体制を徐々に強化していく。国家試験に合格した専門職としての食品化学者たちは、国・自治体・民間により設立された食品検査施設に進出し、20 世紀初頭には人員の大半を占めて、大量のサンプル調査をおこなう体制が整った。ここには、食をめぐる「規律化」が強まる傾向が見られるが、食の安全性をめぐるのは、経済的利益を追求する食品産業界との深刻な対立が続くなかで、間に立つ行政当局が、経済的利益に配慮を示し、条件付で保存料添加や着色料の使用を認めることもあった。公権力は、食教育を通じて国民への管理を強める一方で、経済的・国家的利益を優先して、消費者としての国民の健康が置き去りにされる局面も存在した。こうした食の安全性の国家による保証は、19 世紀後半に構築が始まったが、現在でも未完の問題であることが指摘される。

終章「食」からみたドイツの歴史風景」では、

食の問題が国民国家単位で考察するには本来不向きな対象であるとしたうえで、考察対象を近代ドイツに絞ったのは消極的な理由だけでなく、第二帝政期に食に関わる領域で「古典的近代」から現代に直接つながる「20世紀的近代」への転換が進みつつあったという歴史的变化を重視した結果であることが確認される。

以上の本論に加え、本書では読者に具体的なイメージを与えるため、本論に関連する三つのコラムが配置されている。

本書は、日本において歴史研究の蓄積が少ない、食という未開拓な領域を切り開く貴重な業績である。著者が紹介しているように、ヨーロッパでは研究者の組織化が進んでいる。本書がその代表的人物であるトイテベルクラの研究成果にふれることを可能にしたことで、食の歴史研究へのアプローチが容易になったことは強調されてよい。本書で取り上げられている問題群は、著者の旧著『ヨーロッパの舌はどう変わったか——十九世紀食卓革命』（講談社、1998年）とも重なっているが、旧著が食からみた近代ヨーロッパ史の全体像を描こうとする意欲作であったのに対し、本書は旧著で示した諸論点について、ドイツの事例から考察を深めたものであるといえる。

ただ、本書は先駆的な性格を持つ反面、叙述の一貫性という点では課題が残るように思われる。とくにグローバルな次元を意識しつつ、18世紀から19世紀初頭にかけての新しい飲食物の普及プロセスを論じた第I部と、前世紀転換期ドイツ諸都市における社会経済的変容と食との関わりを扱った第II部、それに国民国家論の視点から食のあり方を論じた第III部では、扱われる問題の位置付けが異なるため、第二帝政期ドイツに近代の転換を見出そうとする著者の主張が伝わりにくくなっている。

関連して、本書の叙述にはいくぶんの物足りなさが残ったことも事実である。たとえば、食をめぐる変化の受け手となった、実際にモノを食べた（作った）人びとの姿にもう少し踏み込んでほしかった。いくつか列挙してみる。民衆啓蒙文献を読んだ農民たちは、農業をどのように変革して

いったのか（1章）。市民層がジャガイモを受け入れた過程を、実証的に問題のある料理書以外から説明できないのか（1章）。栄養学に立脚した食教育を受けた労働者の献立は、実際にどの程度「健全化」し、かれらの国民への「統合」に貢献したのか。そしてそのことは、特定の料理を「国民的」とみなすような意識の形成とどのような関係にあったのだろうか（5章）。公権力による食の安全に対する規制を消費者側の民衆はどのように受け入れ、あるいは求めたのだろうか（6章）。いずれも史料面で実証が難しい問題であることは承知しているが、興味の尽きないところである。もっとも、労働者の食生活の実態は、コラム2「労働者の食事風景」で補われており、数値からだけでは見えてこない庶民の声にもふれることはできる。

最後に瑣末な点だが、ドイツ国内での食物受容や消費の地域差について言及する際に、「先進地」や「革新的」、それに「後進地域」という表現が使われている点も気になった（51、146、149頁）。著者自身は、前著『世界の食文化®ドイツ』（農山漁村文化協会、2003年）において、ステレオタイプでとらえられがちなドイツ食文化の多彩さを強調しており、本書37頁でもその立場を再確認しているため、北・中部と南部との地域差に優劣をみているわけではないことは容易に理解できる。ただ、ドイツより国土の狭いスイスが、ヨーロッパの十字路としてドイツを含む周辺地域の食文化の影響を受けているように、南ドイツでも北・中部以外からの影響は想定されるはずである。本書の叙述では南ドイツの食文化に対し、やや静態的な印象を与えかねないように思われた。関連して、本書は南北ドイツで異なる食文化状況が形成されていたことを描き出しているが、第二帝政期の領土は現在よりも東部へ伸びていたのであり、東西間での食文化のちがいが、あるいは関係という視点から見えてくるものはないのか、著者の見解をうかがいたいところである。

しかし、評者が抱いた以上の疑問点の多くはないものねだりであり、今後の研究で考察が深められるべき問題である。食の歴史に関する様々な論

点を喚起し、読者に考えるきっかけを提供したという意味でも、本書には重要な意義がある。評者の要約とコメントには、誤読や誤解にもとづく点も多々あるかと思われるが、著者のご海容を乞うほかはない。私事だが、評者は「観光」という「食」とも関わるテーマを専攻しており、この領域を開拓していく著者の研究姿勢からは常々励ましを受けている。本書を刺激として、「食」の歴史研究がいつそう進展することを期待したい。

(森本慶太)

## 中野耕太郎著 『20世紀アメリカ国民秩序の形成』

名古屋大学出版会、2015年2月刊、A5判、408頁、5800円+税、ISBN 978-4-8158-079-3

本書は、気鋭のアメリカ史研究者である著者が、「17、8年」の孵化期間を経て誕生させた、渾身の著作である。著者自身も述べているように、1990年代に我々は、人、モノ、情報が国境を越えて自由に往来する現実に接する中で、国家やナショナリズムがもはや必要ではなくなる世界が形成されつつあるのかという議論をした。しかしながら、歴史の展開は、むしろその反対に進んできた。21世紀、国家はますます「甲冑」をまとい、国境の壁を高くし、「国益」を論じ、そのために戦おうとする。また、壁の中では、「民族浄化」という名目の他者排除の阿鼻叫喚も、我々は見てきた。まさに、本書の叙述にあるように、「ナショナリズムは現代史の切っ先にある新しい現象」である。本書は、現代の問題であるナショナリズムの展開を、さらには現代世界の中で最もその影響力を行使しているアメリカのナショナリズムを、歴史学の俎上に乗せ、その歴史的根源を解明した。

本書タイトルにあるように、アメリカのナショナリズムは「アメリカ国民秩序」への信頼に根差していると評者は考えてきた。民族的紐帯、文化的同一性、自然空間への郷愁のようなものを基にした、むしろ情念的とも言える、伝統的なナショナリズムに比して、アメリカのナショナリズムは

異質な、自由や民主主義という国家形成の理念、政治体制への信頼に結び付いているのではないかと漠然と考えてきた。本書によって、このような評者の見方は、20世紀アメリカのナショナリズムの深化と展開を見失っている、ないしは見ていないことなのだ痛感させられた。

20世紀、アメリカは「帝国」と呼ぶに値するほどに、その経済力、世界政治での指導力、軍事力を増強し発展し続けた。それは、アメリカが20世紀の二つの世界戦争を飛躍台ととらえ、積極的に参加し、勝者に加担しえたからである。しかも、20世紀のアメリカの戦争は、全て、かの国土を戦場としていない。しかしながら、アメリカという国家は、多種多様な民族、人種の複合体である。19世紀には分裂の危機があった。この多様で不平等な人々の群れを戦争に総動員し、海外の戦場に兵士を送り出す能力(ナショナリズム)を、アメリカはどのようにして獲得したのだろうか。本書ではその過程が丁寧に語られる。

まず、本書の構成と内容を概観しておこう。

- 序章 20世紀アメリカ国民秩序へのアプローチ  
——アメリカニズムと社会的なもの
- 第I部 革新主義と国民国家
- 第1章 「社会」の発見と20世紀アメリカ国民秩序——社会的な平等、社会的な民主主義
- 第2章 浄化される民主主義——投票改革と20世紀の国民
- 第3章 貧困の発見とアメリカ国民——社会的な学知と他者創出
- 第4章 移民コミュニティとリベラルの国民統合論——シカゴ公立学校の外国語教育問題
- 第II部 第一次大戦とアメリカの国民形成
- 第5章 産業民主主義の夢——労働者と20世紀ナショナリズム
- 第6章 移民の戦争、アメリカの戦争——総力戦とアメリカ化
- 第7章 戦争とカラーライン——「分離すれど平等」
- 第III部 20世紀国民秩序へ——1920年代の展開
- 第8章 「新しい社会秩序」構想の行方——シカ

第9章 シカゴ人種暴動とゾーン都市——「分け  
る」統治へ

第10章 20世紀国民秩序の形成——「出身国」  
とカラーライン

終章 現代史としての20世紀アメリカ国民秩序

全3部10章と序章、終章の構成である。著者によれば、19世紀から20世紀初頭のアメリカ社会の「複雑な歴史を鳥の目になって」俯瞰し、書くのだと、恩師であるロバート・ウィービーが常に語っており、著者は本書を著すにあたって、そのことが自分に多大な影響を与えたという。その言葉通り、全10章が取り扱った当時のアメリカ社会とそこに生きた人々の生きざまは複雑でまさに「ジャングル」であった。しかしながら、この10章は三部に分割・整理され、読者にも「鳥の目」を貸してくれている。以下、各部の概略と各章の要点のみを紹介することにしたい。その前に、序章について触れておく。

序章では、20世紀ナショナリズムとは何か、19世紀とは異なるのか、どのように生成されたのかについての著者の概観、ナショナリズムが研究史とともに、歴史を見る基本的姿勢にも触れている。序章とは言え、他のどの章よりも紙数も多く、著者のこの本への意気込みが感じられる圧巻の部分である。著者は言う。19世紀のアメリカ・ネイションの最大の特色は「自由や平等といった市民的な諸権利の享受と、公民としての義務の感覚をよすがとした、立憲的な社会契約としての性格」にあった。同時にそれは地域的コミュニティ＝人工的地域社会の自治意識によって支えられていた。これに対して20世紀のアメリカでは「伝統的な市民主義を称揚しつつ、より強く人々のエスニックな出自や血統にこだわり、またネイションを個人の自由や社会契約を超えた、運命共同体として聖化する傾向があった」。同時に「より工業的で都市的な現代社会のリアリティに即した共同性の探求であった」。この20世紀初頭におけるアメリカ・ネイションの形成プロセスはアメリカ化と人種の分離という、一見矛盾した二つの政治・社会の潮流の同時進行という現象を生み出

した。

19世紀末の工業化進行の中で、「高度な資本主義」「大量生産産業」を支える効果的な労働力が必要であり、労働者の同質性・市民性・規律性の育成が求められた。現実には、急速な資本主義・工業化の発展によってもたらされた矛盾が、特に都市では噴出していった。都市に大量に流入する新移民の集団は、19世紀のアメリカにはなかった、「アメリカ的ではない」思想・文化・宗教・経済（貧困）をアメリカにもたらし、これまでアメリカが経験しなかった新しい「社会問題」の源であるとみなされた。工業化・都市化で起こるこのような社会問題が、新しい移民集団という他者と結びつけられることによって、アメリカ的な国家（社会）の再建にとって、彼らのアメリカ化（市民化）が最大の課題と認識されることになった。さらには、市民になりえない集団も発見・再認識された。市民的資質をはじめから持ち得ない集団は、カラーラインによって峻別・分断・隔離された。貧困や治安の問題、住環境、政治の腐敗や市民性、労働者性までが「肌の色」と結びつけられ、市民資格を持ち得ないとされた人々は、社会から排除されたのである。20世紀の国民化は、南部におけるジム・クローのシステムをさらに洗練・科学化し、政治的統治の理論によって裏付けされ、現実政治では北部工業都市の居住地分離や、移民の法的規制などによって拡大した。アメリカ・ナショナリズムは、強烈なエスノ・レイシャルな色合いを持つことになり、車の両輪のようにアメリカ化と相補いあいながら進行した。

本書は、以上のような「20世紀アメリカ・ナショナリズム」の「異化と同化」の論理がいかにかにアメリカ社会に浸透し、国家統合の理念となっていったのかを見据えたものであるが、その観測地点をイリノイ州シカゴに絞っている。なぜなら、20世紀ナショナリズムの源泉が、19世紀末に蔓延した貧困や労働紛争、階級問題に対して取り組んだ「革新主義者の営み」にあったのであり、シカゴは全米で最も革新主義運動が展開され、同時に20世紀の「社会的な」問題が噴出した地域であったからであるという。著者は、このように、

「革新主義」なるものをアメリカ的ナショナリズムの核心に据えているのである。以上、著者のナショナリズム議論の根幹にかかわる部分である本書「序章」について述べた。

次に第I部を見てみよう。第I部では、アメリカをして19世紀から決別し、社会的なものを含意したネイション形成に飛躍させるエネルギーを提供し、理論的背骨を与えた思想としての革新主義が取り上げられる。革新主義は、実態としての民主主義＝民主主義の社会化を追求したのだが、工業化の影響・付随物としての貧困・社会問題の解決をめざしながらも、民主主義や社会の平等・同質性へのこだわりの中で、アメリカ化が不可能であるとみなされた集団を峻別し、社会的に隔離することに正当性を付与した。同化と隔離という矛盾する方向が、革新主義によって、アメリカ・ナショナリズムの形成の中では矛盾なく結び付けられ、追及されることになった。第I部は、この複雑な過程について、具体的に明らかにしてゆく。

すなわち、アメリカ・ナショナリズムはまず革新主義の論理によって背骨を得て（第1章）、改革としての黒人投票権剥奪と投票権のアメリカ化、外国人投票権の消失、識字テストなどの導入により、「民主主義の浄化」が図られ（第2章）、さらには貧困の発見とそれをアメリカ的でないものと見て、人種・エスニックな文化的他者性に結びつけ排除することに帰結したと論じられる（第3章）。一方でアメリカニズムのリベラルな側面（多元主義）の発露としての公立学校での移民子弟への母語教育が検討されているが、このような取り組みも戦後1920年代には「自然死」したと論じられる（第4章）。

第II部では、アメリカの第一次大戦参戦期間に、「社会の発見」とともに起動した20世紀ナショナリズムが公権力と結びつき、アメリカ化とカラーラインという両輪を装備し、総力戦を闘う国策の一環として定着してゆく様が検証される。また、統合と分離は「社会工学的な国民統治や秩序の論理」に支えられ、戦後さらに増幅したことが指摘されている。

ウイルソン大統領の参戦の呼びかけに対し、呼応したのは中産階級の革新主義知識人のみならず、多くの移民労働者、黒人団体、女性組織など、市井の市民団体だった。彼らは、この戦争——民主主義のための戦争——に関わることによって、市民的権利を正当に要求する機会を与えられると信じた。一方で、総力戦を戦うために、国家、政府はあらゆる中間的な団体・社会的紐帯を掌握、活用して、参戦の正当性を宣伝し、国民が自発的な形をとって国家の行う戦争に協力する、またはしなければなくなる体制を作り上げた。民主主義のための戦争は、マイノリティや黒人の社会の平等化・市民権獲得要求を正当化させたが、他方でこれらの要求を効率的に管理し、国家に統合するメカニズムも構築した。著者の表現によれば、「20世紀の官僚国家が『社会』を抱擁しようとした瞬間」であった。第II部はこの具体的な発現のあり様を労働者、移民、人種の局面から考察する。

戦時労働政策のキーワードは産業民主主義だった。労働者の生活安定を図り、権利を一定程度認め、労働対立を緩和させることが労働者の効率的、科学的管理であり、生産能力を高めるという議論に立脚した産業民主主義は、様々な潮流を含意しながらもウイルソン政権の戦時政策に取り込まれ、具体化され、資本家も労働組合も合意し戦争協力する方向へ総動員するという効果をもたらした（第5章）。また新移民をして自発的かつ積極的に総力戦に協力するアメリカ市民に育て上げる（アメリカ化）運動（第6章）とともに、選抜徴兵制によって、行政による国民の調査・分類・序列化が正当化され、とくにカラーラインによる有色人種の隔離と排除が進んだ（第7章）。著者は同化と排除は「車の両輪」のように相補って、総力戦を支え、20世紀ナショナリズムの基礎となったと議論している。

第III部で、著者は、戦後の1920年代を「新たな民主主義と人種主義が独特の形で結合した20世紀ナショナリズムが、強制力のある一つの秩序として完成し定着していった」時期であったと措定した。大戦後のアメリカ社会には、民主主義へ

の夢を見て戦った移民集団・労働者・黒人の不満が噴出した。1920年代に、労働運動は先鋭化し、人種間暴力が荒れ狂った。これらの問題に対して国家・政府が前面に乗り出し、総動員体制の中で編み上げたアメリカ化のネットワークを増幅強化し、社会的、市民的平等を求める運動をアメリカ的ナショナリズムに吸収しようとした。一方でカラーラインについてはさらに厳格化する法制度を確立した。本書が強調するのは、これらの法制度は単純な保守回帰ではなく、革新主義者たちが19世紀末に構想していた「新しいアメリカ国民の共同体」を形成するために不可欠であったことである。人種的境界厳格化の進行という動きは、戦後混乱の中から沸き起こった大衆ヒステリア的情動に基づいたものであるとは、必ずしも言いえない。「実のところ新しい専門学知が寄り添い、一定の方向に秩序形成を進めようとしていた」のだと。すなわち、この「思想と制度と暴力の束としての国民秩序」こそが、1920年代に完成定着し、1960年代までアメリカを支配することになるのであると述べている。

まず第8章では、戦争が惹起し燃えたぎらせた下からの平等化の情動とこれに水をかけるように、平時への移行を急ぎ秩序回復を行った上からの統治・組織化の原理のせめぎあいを労働者・労働運動の分野で検討している。また、第9章では1919年シカゴの人種暴動を取り上げ、むしろ暴動後に、人種紛争を調停し、暴力の再発を阻止しようとする「法治の暴力」といえるものを俎上に載せた。人種暴動の惨状を目の当たりにしたシカゴのエリートが「シカゴ人種関係委員会」に結集し、暴動原因究明のための「大規模な社会調査を展開し、徹底したフィールドワークを駆使して、都市の人口動態・産業構造を分析し、ある種の生態学的理論」を導き出す。それは「人種混住を回避する」ことであり、「平和的解決」の方向は、自ら貧困者を他者化する傾向のあった黒人中産階級の認めた妥協点でもあった。さらに、第10章では「1924年移民法」に焦点を当てる。ここでは、そもそもこのような出身国による極端な序列化と白人・非白人の峻別（カラーライン）による法律

が正当化された歴史的背景は何かについて言及され、知識人によるステレオタイプ化、白人未満（ハンキー・ステレオタイプ）と呼ばれた新移民集団の格付けの存在が指摘される。その背景には20世紀初頭の優生学や統計学の台頭があったこと、また、都市への黒人の大量移動、労働現場での職の争奪戦などに対する白人新移民の危機意識や嫌悪感も考慮するべきであると述べられる。この時期、アメリカは一気に白人の国になってゆく。

終章では、以下のように、本書で述べてきたことがまとめられている。

「歴史的にはこの新しいナショナリズムは、一九世紀的な市民ナショナリズムに対抗するものというよりは、むしろ「市民的なもの」——すなわち、市民的美德や市民資格などを、エスノ・レイシャルな語彙で上書きし、再定義するかたちで表現されていった」。「識字や貧困、あるいは生活水準をめぐる『社会的な』言説が、二〇世紀的な人種主義と市民性の語りとを媒介していたことは、繰り返して述べてきた」。「両者の間の往還は逆方向にも作用した。つまり、当時の政治エリートが、特定の民族や人種集団に劣者の烙印を押し、移民制限等の政策を推進しようとするとき、しばしばその劣等の根拠は、彼らの識字能力や生活水準から推認される、市民的資質の欠如という議論に帰着した」。「『市民』と人種は互い同士を定義し合う関係にあったのであり、この二つが分かちがたく結びつく中で、二〇世紀ナショナリズムの凝集的な共同性が生み出されていったのであった」。この時代の知性から発せられた多元主義も、著者によれば、「同時代のエスノ・レイシャルな境界や序列から自由ではありえなかった」のだった。

以上概観してきたように、本書は、ナショナリズムという思想の形成史にとどまてはいない。1890年代から1920年代のアメリカ社会状況の中で育まれた「アメリカ・ナショナリズム」のダイナミズムを、社会史の観点からとらえ分析し、著者のアメリカ史への造詣と渉猟された豊富な史料に基づいて検証している。よって、本書には「歴史の実態としてのアメリカ国民」が、すなわち

20世紀初頭のアメリカ民衆——都市市民、労働者、新移民、黒人——が生きている。まさに、「中野史学」の真骨頂であり、魅力である。いうなれば、メルティング・ポットの煮えたぎるさまを、その熱まで含めて伝えているのである。400頁以上の大書であるが、それぞれの章についてはテーマと対象が明確であるので、読者は興味・関心に従って個別に読むこともできる。本書は、歴史を鳥の目で俯瞰しつつも、本書の主題である20世紀アメリカ・ナショナリズムの生成と変容、具体的には「アメリカ化と排除の同時進行」を、目の前で展開する社会事象として浮かび上がらせ、議論の背骨として貫かせているのである。

あえて、浅学な評者の評らしきものを書かせていただくとするれば、「定点観測地点としてシカゴの動向を注視」されている点についてである。北部大都市であるシカゴに注目することによって、20世紀ナショナリズムの源泉となった革新主義に光を当て、その本質である「アメリカ化と排除の同時進行」をより鮮やかに暴き出すことができたことは確かである。ただ、本書の主題が「ナショナリズム」であるだけに、「全国的公論のレベル」というより、地域性といった観点への言及があれば、読者の目はさらに広げられるのではないかと推察するからである。ただし、そのような作業は、我々、著者の後塵を拝する者に課された課題であるのかもしれない。

最後に、本書最終部分で、20世紀初頭に形成された強烈なエスノ・レイシャルの色合いに染められたアメリカ・ナショナリズムが、その後いつ克服されるのか、あるいは克服されないのかという展望についても触れられているので、この点に関して付言したい。著者は、「1970年代までに、この『旧い』ナショナリズムの廃墟の上に、エスノ・カルチュラルな多元主義とカラーブラインドな市民的統合論という二つの理念が新しい民主的

価値として屹立していた。大雑把に言えば前者は多文化主義の、後者は市民ナショナリズムの運動を正統化するものだろう。そして、両者の原理的対立が1980年代以降のアメリカ知性界を分断し、そのこと自体が今日のアメリカ国民社会が何を共有し、何によって接合されているのかを全く見えにくくしている」と述べている。

2015年2月から3月にかけて、CBSニュースが世論調査を行った。調査結果では、1960年代以降、アメリカの人種関係の改善が実現したと答えたのは、「ほとんど」と「少し」を含めて被調査者全体の96%であった。21世紀初頭になって、アメリカ国民はアフリカ系アメリカ人の大統領を選んだ。改善に向かっていることは確かであろう。しかしながら、今日のアメリカの社会状況は、ますます混沌とし、「見えにく」い。本年6月にも、サウスカロライナ州チャールストンの教会で、まさにヘイト・クライム的な銃乱射事件が起こっている。これに関連したその後の南部旗にまつわる紛争のなかで、「南部魂」のような亡霊がいまだ南部を徘徊していることが露にされた。この「南部魂」は、1960年の市民権運動の洗礼の中でも生き残り、70年代以降の多文化主義運動によってもより強められ、さらに黒人大統領の登場によっても根強く生きている。なぜなのか。本書が扱ったのは20世紀初頭のアメリカではあった。「統合と分断」のナショナリズムは今も生き続けているのではないかと。本書を読んで、そもそもそれがナショナリズムというものの本質ではないのかといった疑問も持つことになった。ぜひ、20世紀後半から21世紀のアメリカ社会をも「鳥の目で俯瞰」し、書いていただきたい。僭越至極ではあるが、著者の鋭い眼力は、すでにそこに焦点が当たっているのではないかと想像している。

(安井倫子)

**Khyati Y. Joshi and Jigna Desai (eds.)**

***Asian Americans in Dixie***

*Race and Migration in the South*

Urbana, University of Illinois Press, 2013, x + 299 pp.,  
ISBN978-0-252-03783-2

本書『ディキシーのアジア系アメリカ人——南部における人種と人の移動』は、19世紀末から現代に至るまでの、「アジア系アメリカ人」のアメリカ合衆国（以下、「アメリカ」とだけ表記）南部州におけるコミュニティ形成・人種編成、そして移動の過程を多角的な視点から考察した、序論を含め、11の論文から成る論文集である。

本書のタイトルに含まれる2つのキーワードである「ディキシー（南部）」、そして「アジア系アメリカ人」は従来の研究において両者の接点が無かったかのように思える。概して地域主義的な性格を強調してきた古典的な南部史の叙述は、南北戦争後の動揺とポピュリズム運動を経た後に、世紀転換期からの一連の共同体的暴力と、人種主義の法・制度化へと至る過程を重視してきた。他方、こうした地域主義的性格はアジア系アメリカ人の研究にもあてはまる。アジア系アメリカ人を対象にした多くの研究はアメリカ西海岸、カリフォルニアに集中してきたとも言える。特に、中国系の研究はサンフランシスコ、そして日系の研究はロサンゼルスなどであり、南部を対象にした研究は決して多くない<sup>(1)</sup>。

これに対して、近年になると地域主義的性格を克服した、洗練された議論が南部史叙述にもアジア系アメリカ人史にも現れている。南部史では、社会史の視座から各州の有する人種構成に留意しながら、他国との関係性を明らかにし、南部史叙述を「開く」努力がなされている。これは、アジア系アメリカ人研究においても同様である。本書に即して紹介するならば、その一つに、トランスナショナルな人の移動といった観点からアメリカ史を比較や関係性に着目し、グローバルな空間のなかに位置づけようとするものがある。特に、エ

リック・フォーナーが2000年のアメリカ歴史学会の会長講演に際して、こうした研究が、「太平洋の観点(Pacific Perspective)」を発展させたことで、従来の移民史が着目してきた同化の過程などを越えて、アメリカにおけるマイノリティ集団の経験が、継続的なトランスナショナルな文化・経済的相互作用によって、いかに形作られるかを問うことを可能にした、と述べている<sup>(2)</sup>。本書はこうした潮流と、新しい南部史叙述を接合しようという非常に意欲的な試みである。

本書の問題意識は、序章「ディキシーの矛盾——アジア系アメリカ人と南部」(Jigna Desai and Khyati Y. Joshi)において、旧来「閉じられた南部」として語られてきたこの地域の「例外主義」的叙述を、カリブ海、太平洋、そして大西洋という空間の中に再定位させる、と明らかにされる。ここで「閉じられた」と筆者が述べる時、二つの異なる位相の問題が含意される。一つには、地理的意味でのそれである。概して、ナショナル・ヒストリーのなかでの地理的特性・文化に着目してきた従来の研究は、この地域をグローバルな空間のなかで考察することを妨げてきた、とされる。二つ目に、人種、すなわち認識論的領域での閉鎖性である。世紀転換期から猖獗を極めた、アフリカ系アメリカ人を対象にしたリンチなどを筆頭とする南部社会の共同体的暴力は、「白／黒二分法」的認識の分節枠組みをもって、南部社会の人種関係を象ってきた。かかる従来の研究史に対して、本書は、トランスナショナルな移動の主体としてのアジア系アメリカ人を考察の軸として、南部州が有するグローバルなネットワーク、そして白／黒二元論に回収されない多様な人種化の過程を明らかにする。こうしたアジア系アメリカ人史と洗練された近年の南部史研究が結びつくならば、これは有効な分析素材となりうるだろう。

序章に続く本論は、第1部「人種と場所の解体」(第1章～第3章)、第2部「コミュニティ形成と輪郭」(第4章～第7章)、第3部「人種、地域、そして国家の演出」(第8章～第10章)と続く。第1部で考察されるのは、南部におけるアジア系アメリカ人の人種化の包括的過程であり、続く第

2部は、第1部において示された概念的枠組みの中で、「アジア系アメリカ人」という、特定の地理的範囲に出自をもつ人々を指すこの人種項目の多層性が明らかとされる。最後の第3部で、公民権運動以後の南部という特定の地域において、アジア系アメリカ人であるということの意味と「人種」を語る行為そのものを分析している。以下構成に沿って、各章の要点を紹介し適宜コメントを加えていく。

第1章「アメリカ南部における『東洋』の受容——1880年から1920年までのベンガル人ムスリム行商人のニューオーリンズにおける／を超えての商業網」(Vivek Bald)では、19世紀末にアメリカに到着し、その後ニューオーリンズへ定住したベンガル系の行商人の移動とネットワークが考察される。彼らが扱ったのは、綿やシルク、スカーフやテーブルクロス、絨毯、壁掛けなどの「オリエンタル・グッズ」である。独自の商業網を確立していった彼らは、南部の主要な都市に商業基盤を築き始めた。彼らの商業網の形成は、親族との縁を基軸としたカルカッタからアメリカ南部、とくにニューオーリンズまでに留まらず、観光業の発達とともにキューバ・ベリーズ・ホンジュラス・パナマまで拡大された。こうした、南アジア系の人々が辿った道筋を追跡すると、アメリカ南部州を経由して、カリブ海や中米にまで経済的かつ文化的な活動範囲を拡げていたことが明らかとなる。南部の都市ニューオーリンズを軸にしたグローバルなネットワークの存在は、まさに南部史叙述を「開く」試みとして、興味深い。

続く第2章「人種の裂け目と『半有色』の憂い——ジム・クロー法下のアジア人表象」(Leslie Bow)では、南部諸州において、ジム・クロー法として法・制度化された人種関係のなかで、アジア人はいかなる地位を占めるのかが考察される。つまり、白人性と黒人性の両極のなかで、その間に介在する人種空間が焦点となる。ここで筆者は、「人種の裂け目 (Racial Interstitiality)」という概念を提示する。これは、ホワイトネス研究が主たる分析の対象としてきた、南・東欧系移民が果たした白人化のプロセスと比較して、アジア人の「白

人化できず、されど黒人でもない」という人種的地位を示すものである。しかしながら、こうしたアジア人が白人性と黒人性の間で占める位置は、単なる「中間的」位置ではない。彼らが南部社会で社会的「上昇」をはたす過程で、黒人性を否定しながらも、白人性と完全に結びつくことができなかつた人種的位置である。こうしてアジア系アメリカ人の占める人種的位置が、南部社会の人種関係を各人種間の比較によって分析することを可能にする、と明らかにされる。

第3章「認識なき人種主義——アジア系アメリカ人の人種化のモデルにむけて」(Amy Brandzel and Jigna Desai)においては、バージニア工科大学乱射事件の犯人である、在米韓国人のチョ・スンヒのメディア報道の表象から人種化の要素が分析される。筆者は、人種化の進行の過程を考察するにあたって、人種、ジェンダー、そして身体的・精神的障害など複合的な要素が絡まっているとす。こうした複合的な人種化の過程は、同化の失敗(当該事件)を「人種」の問題から、精神的障害、すなわち個人の資質の問題に還元し、反アジア人差別やレイシズムなどの存在を黙殺することが指摘される。これは、特定の人種と結びついた暴力が、「白人以外」の人種に関しては、エスニックな文化的要素や生得的資質にその原因が求められる傾向であり、つまり、当該事件の分析は、「カラブラインド」や「多文化主義」、「コスモポリタニズム」が謳われるアメリカ社会一般に、そして南部において、アジア系アメリカ人の複合的な「人種化」を分析するモデルとなることが明らかとされるのである。

ここまで、第1部の内容をかいつまんで紹介してきた。主たる問いは、アジア系アメリカ人は南部においていかに人種化されるのか、ということであった。彼らの人種的位置を白人と黒人の人種関係の中で、「裂け目」と見るのか、それとも既存の二極分節枠組みに「上書き」された人種として捉えるのか、という枠組みが提示された。一見すると、南部のアジア系アメリカ人の人種的位置を語る語彙の欠如は、翻って白／黒二極分節枠組みの強さを示すかのように考えられる。しかしな

がら、単純な第三の人種としてアジア系アメリカ人を語るのではなく、この第三の人種から通じて、白人と黒人との関係性を相対的に把握するための概念図が示された。トランスナショナルな移動の主体としての「アジア人」を南部史に接続し、彼らの白／黒二分法に回収されない人種的位置は、まさに本書の問題関心を考察する時の見取り図となる。

第4章「1880年代から1940年までにおけるジョージア州での隔離、排斥、そして中国人コミュニティ」(Daniel Bronstein)では、連邦レベルでの排華移民法や中国人を対象にした州法が、ジョージア州の中国人の家族形態など、コミュニティに与えた影響が検討される。また、白人でも黒人でもない中国人がジム・クロー法との関わりにおいて、いかなる地位を占めたかが考察される。中国人の出・入国の規制を目的とした諸法は、一方で貿易商など、特定の階級や市民権を有する者に対しては、再入国や、妻や子供をアメリカに呼び寄せることを認めていた。概して、男女比が著しく不均等な中国人コミュニティにおいては、母国の中国で結婚相手を探すことが望ましく、したがって、法律が再入国を認める階級を制限するにつれて、家族形態に影響がでた。また、ジョージア州で制定された異人種間結婚禁止法が禁止対象に中国人を加え、さらに連邦法レベルで中国人女性の入国が著しく制限される。加えて、職業形態に応じて、ある中国人たちには中国へと出国することを許され、他方では制限されることで、コミュニティの規模の大小が決まっていたことが明らかとされる。

第5章「辺境から本流へ——新南部におけるアジア系アメリカ人の人口学」(Arthur Sakamoto, ChangHwan Kim and Isao Takei)では、21世紀のアジア系アメリカ人の住民数や地理的分布や社会経済的性格などが主に統計データに基づいて考察される。他の地域に比して、南部社会のアジア系アメリカ人は、高い比率で住民数が増加し、教育、時間給、専門職または技術職での雇用という点で高水準を保ちながら、エスニック集団内部での格差が増大している。筆者は、かかる統計の結果が、

アジア系アメリカ人の人口分布の新たな展望の始まりを示すものであるとする。そしてこれは、ハワイやカリフォルニアなどのような、地理的に国家の周縁に位置する場所から移動しはじめる刺激となる、社会経済的機会の改善といった点によって特徴づけられると指摘される。しかしながら、アジア系内部の格差の進行が今後の問題であるとされる。すなわち、筆者は一方で南部社会が人種間の対立からより開放的な社会へ向かっているが、他方でエスニック集団内部の格差が流入の時期の差によって明らかになってきていることをこうしたデータが示すと結論づける。

第6章「国を失った民——ヒューストンのベトナム人と戦後のコミュニティ形成」(Roy Vu)では、テキサス州のヒューストンにおける、ベトナム戦争以後のベトナム系アメリカ人がコミュニティを形成する過程が分析される。ベトナム戦争が生んだ難民がヒューストンに流入して、ヒューストンのドミナント／マイノリティ・グループ両集団とベトナム系アメリカ人の間に暴力をともなう対立を生んだ。こうした主流社会からの人種化の傾向に対して、ベトナム系アメリカ人のコミュニティは設立当初、反共政策を強調し、南ベトナムの国旗を掲げるなどしてアメリカ社会との融和とコミュニティの結束を図った。一方で、彼らはアメリカの政治システムに参入する傾向を強めるなかで、コミュニティ内部の分断を避け、より強い結集を図るため、その政治的イデオロギーを変更していく。こうして、ベトナム系アメリカ人が主流社会との関係性の中で、政治的手段として「祖国」に対する政治イデオロギーを利用しながら、文化的相互扶助ネットワークなどを通じ、独自のエスニック・コミュニティを確立していく過程が明らかとされた。

第7章「立ち上がり声をあげること——アトランタ都市圏のアメリカ人ヒンドゥー教徒とキリスト教規範」(Khyati Y. Joshi)においては、現代の南部社会で、ヒンドゥー教徒のインド系アメリカ人のコミュニティの主体的活動の展開が考察される。ヒンドゥー教徒のインド系アメリカ人は、白人が優勢で、キリスト教規範が色濃い南部社会の

中で、宗教的にも人種的にも二重に他者化される。しかしながら、社会の周縁に留まるのではなく、むしろヒンドゥー教に対する南部社会の「誤った解釈」に対して怒りと失望を組織的に表明していく。これを筆者は、マイノリティの主流社会に対して承認を求める政治的行動であるとし、同時に現代の多元主義を認める傾向をも表す、と指摘するのである。

第2部で考察の対象となったのは、中国人、ベトナム人、ヒンドゥー教徒など「アジア人」が持つ地理的・文化的多様性、ならびに南部社会の変化とアジア系アメリカ人の人種化の様々なプロセスの絡まり合いであった。最後の第3部で分析されるのは、「カラブラインド」や「多文化主義」、そして「コスモポリタニズム」が語られる、現代の南部社会において、「人種」を語る行為そのものである。

第8章「アジア系アメリカ人の叙述における南部の破裂」(Jennifer Ho)では、南部を舞台とし、アジア系アメリカ人を中心にした、文学と映画作品の読解を通じ、アジア系アメリカ人と南部の関係性を考察している。分析の対象となった小説や、映画が題材にしたのは、朝鮮戦争から逃れてきた韓国人の人種を超えた恋愛と南部社会の緊張関係、イディ・アミン政権によってウガンダから追放されてきたインド系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の人種を超えた恋、そして中国人とノルウェー人の混血としての女性が大おぼのライフヒストリーを辿って南部社会を旅するというものである。ここで分析の対象とされた作品の主人公たちは、例えば、朝鮮におけるグローバルな対立抗争を視覚的に喚起させる存在であり、南部のカララインを越境せんとする存在であったり、植民地主義を想起させる存在であったり、未来の「新南部」の人種関係を象徴するような異人種間の親交の所産である「混血」なのである。すなわち、こうしたアジア系アメリカ人たちは、南部社会にとっては、一方で人種主義と密接に結びついてきた過去を想起させる外部記憶装置のようなものであり、他方では辺境主義的南部と世界とのつながりをもたらす存在でもある。この葛藤

をもたらす存在としてアジア系アメリカ人の位置が考察されるのである。

第9章「予期せぬ組み合わせの中のテネシアン——ヘンリー・チョウのスタンダップコメディ——」(Jasmine Kar Tang)では、テネシー州生まれの韓国系アメリカ人のコメディアン、ヘンリー・チョウを中心に彼のパフォーマンスを、アジア系アメリカ人性と南部文化の相互関係のなかで分析している。筆者は、彼の南部訛りの喋り方、そしてジョークが、彼の「アジア人(Asians)」としての自己表現と常にどこか不調和な印象を聴衆に与えている、と捉える。チョウの南部生まれのアイデンティティと、「アジア人」としてのアイデンティティ、両者を巧みに利用する彼の話法は、単にどちらか一方を構築、あるいはそこから逃れ出るものではない。時にアジア系という範疇を相対化し、南部人として振る舞うことで安心感を聴衆に与えながらも、南部訛りの英語のままステレオタイプの「アジア人」を演じる。彼はまさに、「南部人」でもあり、かつアウトサイダーとしての「アジア人」でもあり、どちらか一方に還元されることを拒絶する存在であることが明らかとされる。

第10章「我々がシティズンシップを失ったように——ベトナム系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人、そしてハリケーン・カトリーナ」(Marguerite Nguyen)では、ハリケーン・カトリーナ前後のニューオーリンズにおける、アフリカ系アメリカ人とベトナム系アメリカ人の間の関係が、「難民」と「市民」という概念を軸に考察される。ベトナム戦争が生んだベトナム人の「難民」は、「難民」という語に人種的かつ法的な含意を有していた。つまり、それは政府の補助の受益者であり、かつ既に社会に存在するマイノリティとしてのアフリカ系アメリカ人やラティーンノとしての脅威である。カトリーナ襲来以前にはこうした緊張の中で、ベトナム系アメリカ人の人種形成がなされた。しかしながら、カトリーナ以後に、その被災者は「難民」なのかという議論が起きる。この用語法に焦点を当てた議論は、誰を法的・公的な支援の対象とすべきかが主たる問いであると指摘される。この社会的に救済されるべき対象を

厳密化する動きは、同時に救済しない領域を創り出していく過程に他ならない。後の都市復興計画で、特にベトナム系アメリカ人が多く居住した、ニューオーリンズ東部は再建の対象外とされる。こうして、カトリーナの後のアフリカ系アメリカ人とベトナム系アメリカ人が人種連帯へと舵を切った事実には、そこに市民でありながら黙殺され、従属的な位置を占めることになった彼らの人種的地位が反映されている、と明らかにされるのである。

第3部の論文、ならびに本書を通底する一つの問いは、南部社会は人種主義を乗り越えたのか、というものであろう。この問いは、第1部の第3章において、「認識なき人種主義」という題で分析された、現代の「人種なき社会」の「人種化」の過程と密接に関係する。「人種なき社会」とは「人種」よりも文化的特質に基づいて人間の差異を強調し、「人種」はエスニシティという広義の現象の副次的な要素である、とする考えである。しかしながら、この考えは人種主義を根絶しようとして、意図的に「人種を黙殺」した現代的「人種イデオロギー」であるとペギー・パスコーも看破している<sup>(3)</sup>。論文集としての本書は、現代アメリカ社会一般の人種論をも考察の射程に含み、改めてその内容の重厚さを感じさせる。

以上、本書の要点をいかいつまんで紹介して、適宜評者のコメントを加えてきた。分析の視点は非常に多角的であり、現代の南部社会までを史的考察の射程に収めた本書は、論文集としての特徴を存分に発揮している。また従来の南部史だけに留まらず、概してカリフォルニアなどの西海岸に集中してきたアジア系アメリカ人研究にも一石を投げようという意欲作である。移民史研究と、ナショナル・ヒストリー、特に南部史叙述の接合という試みは、地域的コンテクストと外部世界とのグローバルな相互作用を史的考察のなかで捉え、描くということを意味しよう。評者の能力をもってして、本書が果たしうる功績を表現しきれたとはいえない。南部史をいかに再構成するのかという展望に、非常に有意義な示唆を与えるであろうこの書物が広く読者の手にとられることを期待して

やまない。

## 註

(1) 数少ない我が国の研究の一つとして、松井美子が南部の中国人の人種的な位置づけについて、ラム裁判を中心に考察している。松井美子「1920年代の合衆国における中国人と『人種的』位置づけ——ミシシッピ州での入学拒否事件を通して」『国際文化学』第12号、2005年、73-88頁。

(2) Eric Foner, "American Freedom in a Global Age," *American Historical Review*, Vol. 106, No. 1 (Feb., 2001), pp. 1-16.

(3) Peggy Pascoe, "Miscegenation Law, Court Cases, and Ideologies of "Race" in Twentieth-Century America," *The Journal of American History*, Vol. 83, No. 1 (Jun., 1996), pp. 44-69.

(松本智憲)

## 藤田拓之著

### 『居留民の上海

共同租界行政をめぐる日英の協力と対立』

日本経済評論社、2015年2月刊、A5判、295頁、  
6500円+税、ISBN978-4-8188-2361-7

本書は、著者が2010年に提出した博士論文「戦前期上海における外国人居留民社会——共同租界行政をめぐるイギリスと日本の関係を中心に」に、若干の加筆、修正を加えたものである。その内容は1920年代後半から1941年末の太平洋戦争勃発までの期間を対象に、上海共同租界（Shanghai International Settlement）の外国居留民団社会について、租界行政をめぐるイギリス人と日本人の活動および対立を軸に構成されている。

序章では南京条約によって上海に設置された共同租界の歴史を概括しつつ、先行研究に触れながら問題提起を行っている。著者によれば、共同租界は1920～30年代にその繁栄を謳歌し、40を超える国籍の人々が「居留民（Residents）」として居住していたが、この狭小な地域では「多様な人々が、それぞれのナショナルな居留民社会を形成し、空間的には重なり合いながらも、互いに融

合せずにコミュニティを維持していた。特に欧米人社会と中国人社会、そして日本人社会の断絶は顕著であった。こうした領域に関する先行研究として著者は、高橋孝助・古厩忠夫編『上海史』<sup>(1)</sup>、『上海租界志』<sup>(2)</sup>、植田捷雄の『支那における租界の研究』<sup>(3)</sup>等を挙げるものの、日本においては租界研究が未だ十全にはなされていないことを指摘している。他方「P・A・コーエンの『中国における歴史の発見』<sup>(4)</sup>における China-centred history の提唱」とそれに対する「イギリス帝国史家ジョン・ダーウィン<sup>(5)</sup>のイギリス帝国史の文脈において中国における外国人の重要性の指摘」という、相対する異なる視点の研究に着目して、「中国における居留民」という存在をどう歴史的に位置づけるかという著者の根本的問題意識を提起している。そのうえで、中国の外国人居留民に関する個別の実証研究としてニコラス・クリフォードの『帝国の甘やかされた子どもたち』<sup>(6)</sup>、著者が最も影響を受けたとしているロバート・ビッカーズの一連の‘Shanghaianders’の研究、坂口満宏の「在外居留地・居留民団の研究の現在」<sup>(7)</sup>に言及しているが、著者はこれらの研究が持つ問題、すなわち、1) 単独のコミュニティにのみ注目し、対象以外のコミュニティとの関係を等閑視しており、2) 租界の存在を所与のものとして、居留民の存在の前提となる租界という空間の維持について十分に検討していない、という2点を指摘している。これらの先行研究とその問題点をふまえて著者は本書の焦点を、1920年代後半からの上海共同租界終焉期における「外国人居留民——とりわけイギリス人と日本人——の社会と、それらと租界行政の関係」に設定し、特に共同租界での多様な外国人居留民の社会構成や、彼らが形成した社会の実態を明らかにすることで、彼ら居留民と帝国との重層的かつ多面的な関係性を「帝国意識」の観点で分析することを主要な目的としている。その手法として行政という側面から「モザイク都市」としての租界社会全体を横断的に検討することを試みている。この点は本書の特徴であるが反面、著者が本来目指した「上海租界」の歴史的層層構造の実態

解明の領域に枠をはめる結果になった。以下本書各章の構成と内容を紹介する。

第1章「上海共同租界と工部局」では全体の導入として、共同租界の成り立ちとその基本法規である「土地章程」の内容を紹介したうえで、共同租界の行政組織である工部局の詳細について分析している。著者に寄れば工部局は、当時のイギリスの市レベル地方自治体としての行政機能と規模（職員数約7000名）を有し、かつ、義勇隊と称される約2000名の民兵からなる軍事組織の保有といった地方自治体をこえる権力を有した「帝国の中の帝国（imperium in imperio）」という存在であった。このような分析を出発点とするところからは、工部局が担った行政権限とそれを担った人々（居留民）の構成を分析すれば、おのずと共同租界の実体が把握できるという著者の意図が読み取られる。しかしながら、その存在の背景にある清国の旧制度意識（たとえば土地は皇帝に属し外国人への売却は不可、「華洋文居」の原則等）と西洋の近代制度意識（自由交易、法の支配等）との邂逅による衝撃や、周辺中国人の認識の変化についての言及がないのは、その後の租界の拡大（変容）に関する周辺地域中国社会の影響（例えば動乱、飢饉による人口流入）を無視、あるいは単純視してとらえているかの印象をぬぐえない。

第2章「イギリス人居留民と居留民社会」では、上海の外国人人口、共同租界の外国人人口、外国人居留民の職業分布の詳細を報告している。また、イギリス居留民がつくりあげた租界の規範や特徴、特に租界という空間を支配していた人種を主要な判断基準とする社会規範を明らかにすることで、彼らのライフスタイルと支配者としての階層意識を紹介している。本章においても、対比として共同租界人口の90%以上を構成する中国人のライフスタイルや彼らから見た「モザイク」空間への認識についての言及があれば、租界を下支えしている下部構造が明らかになってくるのみならず、租界成立期において世界的潮流であった都市におけるモダンライフスタイル<sup>(8)</sup>が、なぜ租界において新興富裕中国人層とともに出現したかの解釈にまで踏み込むことを可能にするのではな

いか。

第3章「イギリス人居留民と租界の危機」では、1920年代後半から1930年代初頭にかけての中国ナショナリズムとイギリス人社会および工部局の関係について、イギリス人支配と中国住民の租界行政からの排除についてその実態を説明し、それに対する中国人住民の代表要求運動とイギリス人社会の対応の経緯について解説をしている。従来イギリス人居留民は「表面上——実態は市参事会の事実上独占と工部局の中国人排除——」のコスモポリタニズムによって支配権を享受していた。著者は「5・30事件」を契機とした中国における英中関係の変化がそれを許さなくなってきた時に、イギリス人居留民たちは何が譲れて（工部局の「中国化」）、最終的に何が譲れないか（中国の司法への服属：恐怖感）をあぶりだしている。これは、本国政府や大企業の対中（貿易、政治）関係健全化と全面的な利害相反ではないが、さりとてトレードオフの難しい当時の租界政治課題の構図を浮かび上がらせている。この中国司法制度への不信感、単純に領事裁判制度での優遇の裏返しによる得失に対するものと言うよりは、中国固有の「人治」と西欧の「法治」との確執に根差すものと捉えるのが妥当とするならば、そこを掘り下げていけば「租界」という空間の興行をより明確に描けたのではないか。すなわち、上海租界に花開いた経済的繁栄を担保するに必要な「制度・機能」は何であったのか、翻ってその外側の中国旧社会に欠けていたものは何であったのかをあぶりだすこともできたのではなからうか。

第4章「上海の日本人居留民と租界行政」では、1870年代初頭にはじまり1940年代前半に10万人を越える規模に達した日本人居留民の人口・社会構成、組織化とその活動について概観したうえで、租界行政の側面から彼らが外国人社会に参入していった過程を検討し、欧米人居留民と関係にどのような影響、変化をもたらしたかを明らかにするとともに特に工部局日本人職員の動静に焦点をあてている。また、第一次上海事変以降の日本の存在感の増大に対する工部局やイギリス人支配層の対応（日本の対中打撃肯定）と本国政府および欧

米マスコミとの認識のずれを指摘しているが、上海租界を取り巻く中国社会（軍閥および南京政府）の影響力を単なるナショナリズムで説明するのではなく中国社会内での「パワーシフト」としてとらえ、その影響力という観点があれば、逆に日英居留民社会の変化がより明快に描き出せたのではないか。

第5章「工部局と日本人」では1920年代後半の日本人居留民の共同租界行政参加要求の一環として工部局警察にも日本人幹部が任命された代表格である上原藩の足跡を追いながら、日本人警察職員の待遇と工部局警察内の地位について分析を試みている。それと同時に、中山水兵事件や2度の上海事変という諸事件における日本人警察官の振る舞いについて焦点をあてることによって、工部局が代表する共同租界の見せかけのコスモポリタニズムに従うよりも、日本のエージェントとして国家的権益を優先するようになっていったという、彼ら日本人警察官たちのアンビバレントな立場を紹介している。これは著者が強い影響をうけたビッカーズの‘Empire Made Me’<sup>(9)</sup>の英国人警察官と対比しながら、その相対化とそれを通じた工部局警察の実態に迫らんとする試みである。その意味で本章は著者の最も思い入れのある部分であろう。また工部局日本人警察職員に関する記述は先行研究に例をみない詳細なものと評価できる。

第6章「工部局市参事会選挙」では、工部局の最高意思決定機関である市参事会を選出する選挙制度を詳細に検討して、共同租界における選挙の意義やその政治文化的側面を明らかにしている。特に1930年代前半における選挙における日本人の存在感と日本人社会の参事増員要求における「会社派」と「土着派」の確執およびそれにたいする英米側の対応と、上海事変以降の華中における日本の存在感の拡大を利用した土地章程の改正の呉越同舟の動き（日本人が求める有権者資格の改正、英米人が考えた参事会の拡大）から、「租界行政をめぐる問題の焦点が、中国人との関係から日本人居留民との関係へと移りかわりつつあった」経緯を解説している。ここにおいて、市参事会選挙制度の解釈および英米日リーダー層の駆け

引きについては詳細を極めるのに比して、言及が少ないのが各本国（政府）の思惑、影響力についてである。上海総領事石射猪太郎については記述があるが、この立場すら本国の総意を表しているわけではなく、英米についても同様のはずで「上海租界支配システム」をとりまく複雑な周辺構造にも今一步切り込みがあればより厚みが増したといえる。すなわち、本書では工部局内部の力関係の推移に関する閉じた記述に終始してしまっており、その背後にあるはずの様々なパワー（エネルギー）とのつながりが今ひとつ見えてこないのが残念である。

第7章「日中戦争と上海共同租界「臨時参事会」の成立」では、1937年10月末の第二次上海事変終結により、共同租界とフランス租界はいわゆる「孤島期」に入ったが、経済活動はむしろ繁栄し、戦略上の重要性は増してゆき、租界行政問題が「国際化」してゆく過程を解説している。また、その後1940年初頭の工部局と日本の関係の緊張化と、増税案をめぐる日本人納税者協会会長林雄吉が市参事会議長ケズィックへの発砲に端を発した「臨時市参事会」の発足から1941年末の太平洋戦争勃発による共同租界の終焉までを、一時的にはあるが「日英米三国間に常に円満な協調」を共同租界の行政にもたらしたとしている。この時期における工部局と日本人居留民間の緊張関係の頂点でもある、林雄吉の発砲事件にいたる「土着派」日本人居留民のメンタリティーとその背景にある「リトル長崎」とも称された日常生活における利害関係について、古厩らの先行研究とおなじく詳細な説明がなされていないのが残念である。個人（集団）の利害の発露をナショナリズムという言葉で一括りにしてしまうのは輻輳する利害関係を軽視することであり、先に述べた中国人社会でも同様である。

終章において著者は、1850年代から1941年の日本軍の上海占領に至る間、上海共同租界はほぼイギリス帝国の一部すなわち「橋頭堡」として機能した。その間、この認識は中国人にも共有され、中国ナショナリズムが台頭してきた1920年代以降、適度な「中国化」をおこなうことで、既

存の租界体制を保持することに成功した。さらには、上海に形成された日本人居留民社会は租界行政を通じてかろうじて他の外国人社会と結びつけていたと結論づけている。すなわち著者は序章で述べたように、高橋、古厩らの通史、包括（パノラマ）的先行研究に欠けている点でもあるが、モザイクと称される複数の分断的居留民グループが、実は相互影響しあうことでシステムとしての租界行政を構成していた実態を詳しく明らかにし、通説的な「上海＝魔都：すなわち帝国主義の鬼っ子。英中日国家間の真空地帯」という解釈を超える定義を試みている。

惜しむらくは、先にも指摘したが、工部局というシステム内の支配力学関係の構成描写に留まったことである。たとえば、中国人でいえば、租界居留民の外側には、近縁住民、関係人脈、かれらが構成する社会空間が租界に及ばず影響力（引力と反力）が存在したはずで、特定大人物（軍閥首領、大商人等）のみで語れるものではないと考える。欧米人、日本人についても同様である。2000年に古厩は『上海——重層するネットワーク』<sup>(10)</sup>でネットワーク論を試みているが成功しているとはいえない。さらに言えば、19世紀半ばの清朝中国に突如としてあらわれた「帝国の中の帝国」である上海租界はそれ以前のそこ（「場」）におけるエネルギー調和を大きく乱すとともに必然的に力学的に接する遠近辺とエネルギー交換を行ってエネルギー調和に向かうこととなる。これが約100年間の上海共同租界の変遷（歴史）であると言える。

これを説明するのに、近年の歴史学の潮流にデビット・クリスチャンらが提唱する「ビッグ・ヒストリー」<sup>(11)</sup>論がある。これは歴史学の“perspective”を137億年前の「ビッグ・バン」から今日に至る宇宙生成の過程にまで拡張しているが、そのバックボーンは理論物理学における「超弦（ひも）理論」である。この理論は現時点で「実証」されていないが「時間、空間、物質、力のすべての成り立ちがひとつの理論で説明できる」として画期的かつ有力なものである。この仮説を歴史学に応用出来れば従来ともすれば独立的に捉え

られてきた、人間の活動（経済、軍事、政治、社会）や地理学のおよび生物学的環境等の地球上のありとあらゆる事象が、関連性を持った物理（エネルギー）現象として説明可能となる。すなわち、時間軸で歴史的空間を切り出してみるとそこには人間を含めたあらゆる物質および、その存在を可能とする「場」があり、そこでの現象としての歴史は（統計学的なエラーによるゆらぎはあるものの）一つの解釈に収斂していくことが可能であるということである。ごくシンプルに上海租界を例にとって解説すると、あるタイミングで一見閉じた空間（場）が誕生し、そこに「居留民」という生物集団が移動してきたが、彼らは生存に必要なエネルギー（食糧、その他）を遠近は別として周辺から吸収することとなる。また、永続的生存を可能ならしめるための活動（経済、軍事、文化）を行おうとする。すなわち「工部局」は生存（活動）のために構築したシステムの一つである。一方、周辺中国人集団はその「場」のエネルギー変化を受けて自らの生存のための活動を開始する。また、エコロジカルな環境変化も同様である。そして、その変化はさらにその周辺に波及してゆき、ある時点でのエネルギー調和にむかって進行してゆくことになる。

この観点からすると、藤田の試みは上海租界の工部局システムに限定したエネルギー構成の説明には成功しているが、それが乗っかっている「場」やその周辺、さらには外縁的に存在しているエネルギー（人や集団の活動）の存在や構成にまで解釈の領域を広げていないのは残念である。従来の「租界」の歴史的存在は「帝国主義（的侵略）」やそれに対する「ナショナリズム（による対抗）」の舞台、その繁栄は「魔界に咲く（あだ）花」という比較的単純なエネルギー方程式で解釈されがちであった。著者の研究はそれにたいして歴史学からみた上海租界の実態を行政システム論から捉えようとする新しい試みであり、言わば「歴史場」を垣間見ようとするものでもある。その意味でも対象領域を広げ、下部構造を構成する集団や周辺の、遠隔的に影響力を及ぼす集団の利害に基づく動的行動様式（「場」に及ぼすエネルギー）の解

明が行われれば、新たな「租界」の歴史的解釈が可能となるであろう。

註

- (1) 高橋孝助、古厩忠夫編『上海市——巨大都市の形成と人々の営み』東方書店、1995年。
- (2) 《上海租界志》編纂委員会編『上海租界志』上海科学院出版社、2001年。
- (3) 植田捷雄『支那における租界の研究』巖松堂書店、1941年。
- (4) Paul A. Cohen, *Discovering History in China*, New York, 1984.
- (5) John Darwin, 'Imperialism and the Victorians: The Dynamics of Territorial Expansion', *The English Historical Review*, 112(1977), pp. 614-642.
- (6) Nicholas R. Clifford, *Spoilt Children of Empire: Westerners in Shanghai and the Revolution of the 1920's*, Hanover, NH, 1991.
- (7) 坂口宏「在外居留民・居留民団研究の現在」（京都女子大学東洋史研究室編『東アジア海洋圏の史的研究』京都女子大学、2003年）
- (8) Jürgen Osterhammel, *The Transformation of the World*, Princeton University Press, 2014.
- (9) Robert Bickers, *Empire Made Me: An Englishman Adrift in Shanghai*, London, 2003.
- (10) 日本上海史研究会編『上海——重層するネットワーク』汲古書院、2000年。
- (11) David Christian, Cynthia Stokes, Craig Benjamin, *Big History: Between Nothing and Everything*, McGraw Hill Education, 2014.

（玉村 紳）

## 踊共二編 『アルプス文化史 越境・交流・生成』

昭和堂、2015年3月刊、A5判、268頁、2700円+税、ISBN978-4-8122-1507-4

アルプスに対するイメージとは、どのようなものか。モンブランやユングフラウなど4,000m級の峻厳な山々が連なる山脈地帯。アニメ『アルプ

『少女ハイジ』から連想されるような牧歌的な場所。それぞれに思い浮かべるものがあるだろう。アルプスを含め、山岳地帯に対する主なイメージは、どちらかといえば開放的というよりも閉鎖的なものが多いだろうか。日本では、山は修験者が籠り、鍛錬を積む場所である。『地中海』の作者フェルナン・ブローデルは、開かれた地中海世界との対比で山岳地帯のアルプスを捉え、「文明普及の大きな流れの周縁」と位置づけた<sup>(1)</sup>。ブローデルの言葉は、閉鎖空間としての山のイメージと結びつく。こうしたイメージの転換を目指しているのが本書である。「越境・交流・生成」というキーワードをもとに、アルプス地域を開放的な場所として捉え、同地域を中心に繰り広げられる人やモノの動き、そして思想や表象のあり方を明らかにし、アルプス地域を中心としたヨーロッパ世界像を描くこと、そしてこのダイナミズムから生み出されるアルプス地域独自の文化を追求することが、本書の主な目的といえるであろう。

アルプス地域内の政治、社会、文化にかんする個別研究なら、おそらく数え切れないほどある。しかし、それを「アルプス」という包括的な視点で、アルプス地域全体をまとめて論じる研究は、それほど多くない。アルプス地域は全長 1,200km にも及び、様々な国に跨っている。そして、各地方にはそれぞれの個性がある。ただ、各地の独自性を貫き、アルプス地域全体を根底で繋げる要素はないのだろうか。それこそが「アルプス」の特徴であり、この地域特有の政治や社会、文化を生み出す土壌となっているのではないだろうか。こうした視点が、先に示した「アルプス」の包括的研究の必要性を求めるのだが、しかし、アルプス地域は幅が広いだけに、各地方の個性から「アルプス」的特色を抽出し、さらにまとめあげるには、かなりの時間と労力を必要とする。その中で、本書の序章でも紹介されているが、ギシヨネ編『アルプスの文明と歴史』やヨン・マチュー著『アルプスの歴史：1500～1900年』と『第三の次元：近代比較山岳史』は、注目に値し、「アルプス」研究を進めるうえで、示唆的な役割を果たしている。

以上で示したような事情もあり、現在「アルプ

ス」研究の試みは、スイスのメンドリシオにあるアルプス研究所をはじめ、様々な方面で共同研究の体制が作られ進められている。また、評者が知る中では、フランスとイタリアの共同で、西部アルプス地域とその周辺を研究フィールドとする研究者が集まり、中世における同地方の特性と一体性を浮かび上がらせる研究が行われている<sup>(2)</sup>。こうした地方レベルの共同研究を含めれば、近年、実に様々なアルプス研究の試みがなされている。そして、本書もこうしたアルプス研究の一環をなしているといえるであろう。多くの執筆者による多彩なテーマが取り揃えられており、各個別研究を総合してアルプスの特性を浮かび上がらせる試みが、本書の中で繰り広げられている。以下ではまず、その内容を紹介していこう。

本書全体は、序章、第1部「人とモノ」、第2部「思想と表象」で構成されている。第1部は全4章から成っており、その後にケーススタディとして6つのトピックが用意されている。第2部は、全5章で構成されており、最後にケーススタディが、こちらにも6つ用意されている。盛り込まれているテーマの多さは、本書最大の特徴といえるであろう。

第1章「河と湖の峠道：アルプスの政治史」（踊共二）では、本書を読み進めるうえで、おさえておくべきアルプス地域の政治状況が記されている。アルプス地域は政治的境界地域であり、ハプスブルク家をはじめ、サヴォワ公家やミラノ公家などの名門家系が、そこに所領を持っていた。多くの勢力が並び立つ中で、アルプスの中心勢力となっていくのがスイスであり、本章ではスイスの誕生から13邦時代に至るまでの歴史が述べられている。さらに、川と湖、そして峠道にも焦点があてられ、この三つの要素が生み出す交通網は、アルプスの内外を繋ぐ重要な役割を果たしていた。最後に、こうした交通網を通じて、様々な政治勢力が交流するアルプスという場所は、新たな価値観や制度を生み出す生成の場であるとして、本章は締めくくられている。

第2章「スイスの戦争と平和：永世中立への長い道のり」（森田安一）では、スイスが中立の立

場を獲得していく過程が示されている。16世紀イタリア戦争の際に、スイスは国家としての中立の方向性を定めた。一方、外国への傭兵の供給も認められた。その結果、スイス兵はヨーロッパ各地の戦争に姿を現し、スイス人同士が相対立することもしばしば生じる。しかし、国家としての中立と各国への傭兵供給の同時並行が、武装中立というスイス特有の立場を生み出していく。スイスの中立は、まさに戦争の中で生まれた。最後に筆者は、中立は一国で成し遂げられたものではなく、様々な国々の政治的な思惑が絡みあって形作られていったのだとする。

第3章「工業化するスイス：チューリヒ農村の場合」（渡辺孝次）では、18世紀チューリヒの農村を中心に、アルプス地域の工業化が、農村社会にもたらした影響について論じている。プロト工業化による家内工業の普及にともない、チューリヒの農村に暮らす人々の生活スタイルは大きく変わった。それは、衣食住、結婚のあり方、さらには労働の倫理にまで影響を与えた。アルプスの農村は、土地も細く豊かな場所ではなかった。厳しい生活環境の中で、工業化という新たな局面を迎えた時に、人々として社会はどのように対応し、変化していくのかが、ここでは鮮明に描き出されている。

第4章「スイス・アルプスへの旅：アルピニズム・鉄道・観光業」（森本慶太）では、スイスにおける観光事業の展開にかんする考察がなされている。ツーリズム誕生の背景には、まず人々のアルプスに対する認識の変化があった。近世において、山は恐怖の対象でしかなかったが、18世紀以降は、科学的研究の対象となる。山の恐怖から脱した人々は、山に登り頂点を目指しはじめる。アルピニズムの誕生である。こうしてスイスの山々に、多くの人が集まるようになると、鉄道が敷かれ、ガイドブックが出版されたり、さらには観光ツアーが組まれたりするようになる。さらに開発は進み、山岳鉄道網が張り巡らされ、宿泊施設も次々と建てられていく。こうしてスイスのツーリズムは定着するのだが、その後は、二つの世界大戦など、社会経済的な影響を受けつつ、成

長と停滞を繰り返していくことになる。

続くケーススタディ「アルプスと地中海：ジュネーヴからマルセイユへ」（深沢克己）では、ローヌ河谷を通るマルセイユ-ジュネーヴ通過交易に焦点をあてる。このルートでアルプス地域は地中海に繋がり、さらにはより広い海洋世界へと繋がっていく。そこにはアルプス地域の開かれた姿がある。「都市民・農民の「名誉」文化：アルプスとその周辺地域」（田中俊之）では、バーゼルにおける「名誉の文化」の実践が紹介されている。中世ヨーロッパにおける都市や農村で、名誉は社会の秩序を規定するひとつの要素であった。スイスにおいても、やはり名誉を重んじる社会があったことが、バーゼルの事例として実証されている。「アルプス環境史の試み：川が結ぶ都市と森林」（渡邊裕一）では、近代以前の「中心資源」である木材に注目する。アウグスブルクを事例に、中世後期から近世にかけての木材調達の状況と、それともなう森林財政の問題、さらには森林で働く人々の状況やレヒ川を利用した木材流送などについて述べられている。「ヴァチカンのスイス傭兵：その衣装の成立」（黒川祐子）では、20世紀初頭スイス傭兵隊長であったジュール・ルボンが制作したスイス傭兵の衣装に注目しつつ、その歴史を辿る。その特徴と変化については、107頁図1のルボン制作の衣装の作品と、108頁図2「ランツクネヒト」を見比べるのが良いだろう。「アルプスの少女ハイジ：その世界観と歴史的背景」（渡辺孝次）では、『アルプスの少女ハイジ』作成の現場に迫る。19世紀のチューリヒでは、農村がようやく都市の支配から解放された時代であった。そして、著者ヨハンナ・シュペーリの夫が保守派の最高権力者であったことは、この作品の背景を描くのに大きな影響を与えていた。「ホテル経営者ザイラーとツェルマットの観光開発」（森本慶太）では、ツェルマットにおける観光事業の展開について書かれている。観光開発にともないインフラの整備や、鉄道の敷設、ホテルの建設などが進められ、ツェルマットには新たな景観が生み出される。人々が集まり、経済が活性化する一方で、かつての生活環境と慣習のなかで生きよう

とする現地住民との間には、大きな軋轢もあった。観光事業の光と影が、ここでは描き出されている。

以上が、アルプス地域における人とモノの動きに焦点をあてた第1部である。以下では第2部の内容の紹介を行う。第5章「アルプス世界のルネサンス：南と北のあいだ」（踊共二）では、ルネサンス文化におけるアルプスの特徴を抽出する。ルネサンスは、北と南で大きく性質が異なるとされる。南は開放的で、北は抑圧的・宗教的であったとされるのである。では、その間に位置するアルプス地域におけるルネサンスの特徴とはどのようなものであろうか。それは、二つの性質が混じり合った点にある。山岳地帯に象徴されるアルプスの自然環境が生み出す特性、そして人々の交流の場としてのアルプス地域という特徴が相俟って、複合的なアルプス的ルネサンスが生み出されることになる。

第6章「宗教改革とカトリシズム：バロック文化の興隆期まで」（本間美奈）では、スイスから広がる宗教改革の展開を示す。ツヴィングリとカルヴァンの活動から火がついた宗教改革の動きは、スイス改革派教会の誕生に繋がる。これがひとつの中心となって、改革派の波がヨーロッパ各地に波及し、各地で拠点が築かれていく。こうしてスイス改革派教会を軸とした、幅広いネットワーク網ができあがる。このネットワークは、各地で弾圧される新教徒たちの亡命ルートとなり、宗教戦争期に厳しい立場に晒された改革派の人々が生きていくための柱となった。スイスの宗教改革は、「越境」と「交流」の渦中で展開されていたのである。

第7章「アルプス発の文明批判：ジャン＝ジャック・ルソーの世界」（小林淑憲）では、ルソーの思想の源流に迫る。「サヴォワ人叙任司祭の信仰告白」で、ルソーは叙任司祭の口を通して、当時の社会や制度、そして宗教に対して批判を加える。そして人間の自由意志を認めつつ、原罪を重んじない考えに行き着く。こうした宗教思想は、当時ジュネーヴ及びその周辺地域でよく見られるものであった。ルソーはジュネーヴに生まれ、20代までアルプスで生活していたのであり、上記

のようなルソーの思想の根底には、アルプス地域での経験から育まれた感性があっただろうと筆者は述べる。

第8章「ヨーロッパ世界のナショナリズムとアルプスの多民族国家」（穂山洋子）では、19世紀以降のスイスにおける国民国家形成の歴史が詳述されている。言語、文化など多様性に富むスイスが、ひとつの国民国家としてまとまるには、包摂と排他のふたつの要素が必要であった。前者は共有の歴史の創造と、それにともなうモニュメントの作成、さらにはスイスを象徴するものとしてのアルプス、農民（牛飼い・羊飼い像）、牛が、スイス人としての国民意識を駆り立てる道具となった。後者は、他国からの政治的干渉が、「他者」と「我々」を意識させ、国民意識の高揚を煽った。こうして、スイスは多様性を保ちつつ、ひとつの国民国家を築き上げていった。

第9章「アルプス絵画：その曙からたそがれまで」（岡村民夫）では、アルプスを題材にした絵画の歴史の変遷を辿る。風景の捉え方は、時代によって異なる。アルプスの表象は、「風景＝視覚」の歴史を顕著に示してくれる。アルプス絵画の曙とされる初期フランドル派のコンラート・ヴィッツ『奇跡の漁り』の中で、アルプスは背景のひとつであるとともに、そこには絵の主題を浮き立たせる隠喩が含まれている。ルネサンス期のレオナルド・ダ・ヴィンチ『アルプス山中の嵐の風景』におけるアルプスは、自然の荒々しさが存分に表現されている。アルプスの厳しい自然の表現は、19世紀J. M. W. ターナー『雪嵐、アルプスを越えるハンニバルとその軍隊』の中で、さらに象徴的に描かれる。その後、抽象絵画の登場と、それに続き写真や映画などの新たな表現手法の登場により、アルプスの風景画は近代絵画の表舞台から徐々に退いていくことになる。

続くケーススタディ「中世の巡礼路：銀嶺の世界からサンチャゴへ」（猪刈由紀）では、アルプスからサンチャゴ巡礼に向けたルートが紹介されている。中世以降スイスでは、聖ヤコブ崇拝が広がっていた。当時のスイスで、聖ヤコブはしばしば教会や兄弟団の守護聖人なのであった。そして、

聖ヤコブ崇拜は巡礼という形で、遠くスペインの地にまで繋がる。「異端者たちのアルプス越え：自由を求めたイタリア人」（高津美和）では、イタリアの宗教改革者ベルナルディーノ・オキーノに焦点があてられている。オキーノは、改革派の思想の影響が見られるとして、ローマ教皇庁から異端視され、亡命を余儀なくされる。向かった先がスイスであった。ジュネーヴではカルヴァンと思想的に対立することになったのだが、それはこのスイスが自由な発言ができる場だったからこそであった。スイスは自由を求め、再起を願う人々が集まる場所であった。「知の交差点：大学と出版の町バーゼル」（佐藤るみ子）では、15世紀に目覚ましい発展を遂げた都市バーゼルが紹介されている。もともと経済的に重要な拠点であったバーゼルに、15世紀に大学が創設され、続いて、印刷工房が建っていく。そこではヒューマニストたちの著作が多く出版された。こうして知的交流あるいは情報発信の場としての都市バーゼルが姿を現すようになる。「飛び交うニュース：フッガー家の通信網とアルプス」（梅香央里）では、フッガー家のヨーロッパ単位で広がるネットワークと、それに乗って伝わる情報について書かれている。フッガー家のネットワークを通じて収集された情報をもとに作られた「フッガー通信」は、同家のネットワークの広さをよく表しており、アジアや南米にかんする情報もそこには載せられていた。「改革思想を詩にのせて：活字と楽譜の伝達力」（本間美奈）では、ジュネーヴを中心として、『ジュネーヴ詩篇歌』がヨーロッパ各地へと伝播していく様子が描かれている。『ジュネーヴ詩篇歌』は、宗教改革の運動と結びつき、改革思想を象徴するものとなる。そして、各国語での詩篇歌がヨーロッパ各地で作成されていった。最後に筆者は、俗語で歌うことによる改革思想拡大の可能性を示唆する。「調和する不調和：ブルクハルトのヨーロッパ認識とスイス」（森田猛）は、スイスを代表する歴史家ブルクハルトが、1869年5月4日にバーゼル大学で行った講義の言葉の引用から始まる。「調和する不調和」。これは多様性の共存を示す言葉である。19世紀の国民国家

礼賛の時代に、国民がスイスかドイツかを迫られるなかで、ブルクハルトは学生たちに新たな道があることを指し示したのであった。

以上が本書の内容である。多種多様なテーマが各章、各ケーススタディで完結していることから、読者はどこからでもアルプス文化史にアプローチできるようになっている。そして、越境・交流・生成というキーワードは、各論をひとつにまとめ、従来とは異なる開かれたアルプス地域というイメージを読者に喚起させる。

最後にいくつかの論点を提示して本書評を締めくくりたいと思う。ひとつ目は、本書がアルプスとして取り上げている地域にかんするものである。序章で述べられている通り、本書で主に取り上げられている地域はスイスである。ケーススタディにおいて、フランス、ドイツのアルプス地域にかんするテーマも見られるが、やはり重きを成している部分はスイスといえる。確かに、アルプスを代表する国はスイスであり、アルプスを最大限に利用しているのもスイスであろう。ただ、「アルプス」文化史と題するなら、当然、フランス、イタリア、そしてオーストリア、さらにはスロヴェニアのアルプス地域も取り上げる必要があり、全体としてももう少し他地域への目配りが必要であったように思われる。例えば、フランス方面のアルプス研究では、サヴォワ研究がひとつの主要テーマとしてある。中世においてサヴォワ伯は、フランス王家やハプスブルク家、さらにはイングランド王家やビザンツ皇帝の家系とも姻戚関係があり、ヨーロッパ規模の人的ネットワークを保持していた<sup>3)</sup>。西部アルプスの地からヨーロッパ全体へと広がるネットワーク網は、本書でいう越境と交流の所産といえる。これはほんの一例であり、サヴォワには政治、文化、社会の面における、越境、交流、生成の跡を多く見いだすことができる。本書での成果と掛け合わせると、よりアルプスの特徴が鮮明に浮かび上がってくるはずである。

ふたつ目は、都市と都市の政治文化についてである。ケーススタディでは、ヨーロッパ内に広がる交易網の中心としてのジュネーヴ、そして大学と出版の町としてのバーゼルが紹介されている。

しかし、都市の法律や、制度、そしてそれが作り出す社会、及びそこから生まれる政治文化などについては、本書の中で触れられていない。都市は多くの人々が暮らす場所であり、本書の副題では、交流と生成にかかわる場所である。アルプス文化を育む場所として、都市の性質と特性については言及が必要であっただろう。森田安一氏の一連の研究によると、スイスの都市チューリヒのツンフトは、都市のあらゆる側面で不可欠な存在であり、さらに政治団体のような性質を持つのが特徴であったとされている<sup>(4)</sup>。こうしたスイス都市のあり方とアルプス文化の生成とは、分ち難く繋がっているはずである。

三つ目は農村及び渓谷共同体にかんしてである。農村及び渓谷共同体は、アルプス地域において都市とともに重要な文化の担い手である。第1部第3章で工業化によるスイス農村社会の変化については触れられていたが、農村及び渓谷共同体の内部の状況や、組織、慣習などについては、本書の中で言及されていない。服部良久氏は、主にティロルを中心に牧草地をめぐる農村間、あるいは農村と他勢力との間で起こる紛争に着目し、解決にむけてとられる仲裁（調停）のネットワークの機能について明らかにしている。それは、山岳地域の自然・地理的環境と放牧活動に重点を置いた農民の日常的営みの中で形成されるとし、アルプス地域の特性のひとつに、この紛争解決のあり方を位置づけている<sup>(5)</sup>。こうした慣習も、やはりアルプス地域特有の文化を支える土台である。都市と合わせて文化の基調を成す部分の説明を、ひとつのテーマとして設定し、論じる必要があっただろう。

以上の指摘は、本書の性質を鑑みると、おそらく意図して省かれた部分であるようにも思われる。また、「あとがき」で、本書は「研究者集団の独占物」ではなく、「アルプスを軸として互いに交流するヨーロッパ諸地域に関心をもつすべての人のために編まれた入門書」であるとしている。煩雑な説明になりがちな政治史や制度史の部分は、第1部第1章で軽く触れ、読者にはアルプス地域の興味深いテーマを取り揃えた、後続の章を読み進めることを促す。また、フランスやイタリ

アを含んだ幅広いアルプス史については、スイスとしてのまとまりを優先させて、あえて課題として残しておいた。本書の構成及び「あとがき」からは、このように読み取れる。ただ、読者には本書のその先にある、さらなる多様なテーマと論点を提示しておくべきであると考え、あえて以上の三つの問題点をあげさせていただいた。

編者による、取り上げるテーマの取捨選択が明確になされたことで、本書はまとまりを持ち、想定通り幅広い読者に読まれる作品となっている。本書を通じて、今後アルプス地域に関心を持つ人たちが増え、ますますアルプス研究が活性化することであろう。

## 註

- (1) フェルナン・ブローデル（浜名優美訳）『地中海 I 環境の役割』藤原書店、2004年、48頁。
- (2) この研究活動の成果として、以下の二冊が出版されている。Guido Castelnuovo, Olivier Mattéoni(dir.), « *la part et d'autre des Alpes* » tome I : *les châtelains des princes à la fin du Moyen Age*, Chambéry, 2006 ; Id., « *la part et d'autre des Alpes* » tome II : *chancelleries et chanceliers des princes à la fin du Moyen Age*, Chambéry, 2012.
- (3) Bernard Demotz, « La politique internationale du comte de Savoie durant deux siècles d'expansion (début XIIIe-début XVe siècle) », *Cahiers d'Histoire*, t. XIX, 1974, pp. 29-64 ; Id., *Le comté de Savoie du VIe au XVe siècle : pouvoir, château et état au moyen âge*, Genève, 2000, pp. 19-34.
- (4) 森田安一「西欧中世における都市と農村：都市チューリヒの領域支配政策について」『史潮』第8号、1980年、5-31頁；同『スイス 中世都市の旅』山川出版社、2003年、26頁。
- (5) 服部良久『アルプスの農民紛争』京都大学学術出版会、2009年；同「ヨーロッパ中・近世史におけるアルプス地域：山岳地方における社会・国家・コミュニケーション」『京都大学文学部研究紀要』第51号、2012年、71-106頁。

(上田耕造)

藤川隆男・後藤敦史編  
『アニメで読む世界史 2』

山川出版社、2015年1月刊、A5判、248頁、  
1500円＋税、ISBN978-4-634-64074-0

小さいころ、家族と一緒に映画館へ観に行った。毎週同じ時間にテレビの前で放送を待ちわびた。何気なくテレビをつけたら放送中で、つい最後まで見てしまった。レンタルビデオショップで、なぜか目に留まって借りてきた。友だちと感想や思い出を語り合った。アニメにまつわるこのような経験は、多くの人が持っているのではないだろうか。ウォルト・ディズニーの『蒸気船ウィリー』がアメリカで公開されてから87年、手塚治虫の『鉄腕アトム』が日本で放映されてから52年、アニメは日本人にとってすっかり身近なものになった。映画館でもテレビでも、アニメ作品はあって当たり前ものになっている。

このようになじみ深いアニメの力を借りて、世界史になじみの薄い人でも楽しく読めることを目指したのが、本書『アニメで読む世界史 2』だ。「アニメから世界史がわかって、受験を控えている人は読めば大学入試に合格し、働いている人は職場や飲み会で話すネタができる」（本書6頁）という目的からも分かるように、歴史学を専門としない人を対象とした入門書である。同様の趣旨で好評を博した『アニメで読む世界史』（藤川隆男編、山川出版社、2011年）の続編にあたる。「はじめに」と「あとがき」を除き、すべて執筆者の異なる11章が、各章で題材とするアニメ作品の描く時代が古い順に並んでいる。以下では、まずそれぞれの章の内容を簡単にまとめて紹介し、その後で全体に対するコメントを述べたいと思う。

第1章（齊藤茂雄）では、ディズニー映画『ムーラン』を通し、作中では敵である遊牧民の視点から中国王朝と遊牧民の関係が語られる。作中では中国人と遊牧民は敵対し戦争を行っているが、歴史の中で両者がずっとそのような関係だったわけではない。遊牧民が中国に侵入し掠奪を行うのは

生活必需品が不足したときだけで、交易でそれが満たされるようになれば、戦争は少なくなった。だが、掠奪を行う遊牧民のイメージは「華夷思想」と結びつき、遊牧民を「野蛮人」とする偏見が中国人の間で形成された。

この偏見という問題は、第2章（富田暁）の大きなトピックでもある。本章では、ディズニー映画『アラジン』を題材に中東から中国までを繋ぐ海のシルクロードを論じているが、同時に原作に見られるアラブ人の中国やアフリカに対するイメージも議論の対象としている。原作である『千一夜物語』では、物語の舞台は中国で魔法使いの出身地はアフリカとされていた。これは、これらの地域が中東から遠く、アラブ人からすれば不思議なことが起こる辺境と見なされていたことに由来するという。

第3章（中村翼）では、歴史研究の成果を取り込んだスタジオジブリ作品の『もののけ姫』を取り上げ、中世の日本社会で起こった変化について説明する。このころ、日本では、荘園の開発と市場経済の発達で環境破壊が進み、仏教が社会に浸透したことで、神々への信仰が失われようとしていた。また、作中の登場人物が明朝から火器を入手したと説明されていることから、各地に火器が普及した同時代のアジアの状況にも触れている。

第4章（松尾佳代子）は、ヴィクトル・ユゴー原作のディズニー映画『ノートルダムの鐘』を題材に、中世から近世へ移行行くパリに暮らす民衆の生活を描く。中世において、貧民は教会の保護を利用し、祝祭で日頃の苦しさを紛らわせ、たくましく暮らしていた。しかし、近世になると貧民の保護は国王を中心とする公権力が担うようになり、彼らには労働が課せられ、それに従わない人々は排除された。このような状況で祝祭も以前のような力強さを失っていき、民衆は公権力への服従を余儀なくされていく。

第5章（岩崎佳孝）では大西洋を越え、アメリカ大陸が舞台となる。ディズニー映画『ポカホンタス』を題材に、北米への白人入植者と先住民の関係を説明する。当初、入植者たちは先住民に頼ることで何とか暮らしていた。だが、やがて自力

での生活が可能になると、土地を求めて先住民と対立するようになった。先住民のボカホンタスが白人と結婚したことで両者は友好関係を築くが、それも彼女の死後破綻してしまう。戦争の末先住民は殺され、土地を追われ、各地に離散してしまった。同様のことは、今後白人と先住民の間で何度も繰り返されることになる。

第6章（藤川隆男）も、第5章と同じく白人が入植した地域であるオーストラリアを舞台にしている。「世界名作劇場」シリーズの一つ、フィリス・ピディングトン原作の『南の虹のルーシー』で描かれるオーストラリアは、「中産階級のための天国」を目指して建設された植民地で、キリスト教のどの宗派も活動することができた。そのため、土地と共に信仰の自由を求め、イギリス人以外もオーストラリアへ入植した。しかし、彼らの入植は、先住民を不当な争いに巻き込み、新たな動物を持ち込むことで同地の生態系を変化させてしまった。

第7章（木谷名都子）では、ラドヤード・キプリング原作のディズニー映画『ジャングル・ブック』を取り上げる。この章では、インドを舞台とするこの作品にイギリスの存在が関わることに着目し、英領インドの状況について説明する。インドはイギリスの支配下に置かれて以来、その教育も工業もイギリスの都合に合わせて利用されることになった。だが、これが結局はインド独立の指導者を生み出し、また海外市場でのイギリス綿製品のシェアを脅かすことになる。インドの人々はその従属的地位にただ甘んじていたわけではなかった。

第8章（水田大紀）では、エドガー・ライス・バロウズ原作のディズニー映画『ターザン』を手がかりに、インドと同じくヨーロッパの支配下に置かれた帝国主義時代のアフリカ大陸が描かれる。この時代には多くの西欧諸国がアフリカに進出したが、それはアフリカを「文明化」という理由で正当化された。このように、ヨーロッパ人はその他の地域の人々を軽視していたが、この姿勢は原作におけるアフリカの描写にも反映されている。だが、交通や情報伝達の手段が発達したことで、アニメ作品ではこの偏った見方が修正さ

れたという。

第9章（後藤敦史）では再びアメリカ大陸が舞台となる。「世界名作劇場」の一作で、ルイザ・メイ・オルコット原作の『愛の若草物語』を取り上げ、「家族」をキーワードに南北戦争期のアメリカ合衆国を論じる。南北戦争は奴隷制を巡る合衆国北部と南部の対立から始まったが、この奴隷制度によって多くの黒人が家族から引き離された。この戦争では新しい兵器が用いられたため大勢の人が亡くなり、身元不明のまま家族の下へ帰ることもできなかった。残された家族の求めを受け、これ以来国家が戦死者に関する説明の責任を負うことになった。

第10章（森本慶太）では、スタジオジブリ作品『紅の豚』を手がかりに、戦間期のイタリアを中心に当時の世界の状況を描写する。この映画の主人公は飛行艇に乗っているが、飛行機は当時最も注目を集める乗り物だった。飛行機の登場には第一次世界大戦が関係しているが、平和なこの時期には距離や速度を競うレースがいくつも行われ、「空の英雄」を生み出した。だが、これは東の間の平和だった。すでに台頭を始めていたファシズム勢力が世界恐慌をきっかけに対外侵略をはじめ、このような動きがやがて第二次世界大戦を引き起こしてしまう。

最後の章となる第11章（本井優太郎）は、スタジオジブリ制作の『平成狸合戦ぽんぽこ』を題材にし、高度経済成長期の日本に焦点を当てる。公害問題に悩まされたこの時代、都市の郊外に住宅街を作るニュータウン開発が行われた。しかし、これは森林や生態系の破壊という新たな環境問題を引き起こした。開発は地域住民たちの同意を得ないまま行われたが、これによって彼らと新たにニュータウンにやって来た住民たちの間には深い溝が残った。このように、住民の気持ちを見ない計画は決して過去の問題ではなく、東日本大震災後の現代にも通じるものだと本章はまとめている。

以上のように、本書を構成する各章は、あるアニメ作品を手がかりに、その背後に潜む歴史的現象を説明するという形式をとっている。「アニメ

から世界史がわかるといふ趣旨を具体化したものだろう。この形式と趣旨はどちらも前作『アニメで読む世界史』から共通しているが、今作ではいくつか変更が行われている。一つ目は、論じる時代と地域が多様になったことだ。前作では、ほぼ19世紀の欧米にのみ焦点を当てていたが、今作では、時代は古代から現代まで、地域は北米とオセアニア、アフロ・ユーラシア大陸全体に広がった。それによって、「はじめに」で述べられた編者の狙い通り、「世界史」のタイトルにふさわしいものになった。二つ目は、考察対象とする作品のヴァリエーションが増えたことだ。前回取り上げられた作品は、すべて「世界名作劇場」シリーズに属する作品だった。だが今作では、アニメを見ながら世界史を語って「ママやパパが子どもの尊敬のまなざしを勝ち取るため」(同6頁)には、「世界名作劇場」以外も必要だとし、スタジオジブリとウォルト・ディズニー・カンパニーの作品も取り上げている。日本だけでなくアメリカ合衆国という海外の作品も含めることで、上記のような多様な時代や地域、テーマについて語る事が可能になった。そしてより重要なのは、「世界名作劇場」にあまりなじみのない人でも、この本に興味を持ちやすくなったことだ。

これらの変更は、単なる世界史の本ではなく、「楽しんで読む」(同12頁)ことができるものを作るという目標に対し、真摯に向き合った結果だろう。このねらいは、ほぼ成功しているといつてよい。

しかし一方で、変更のために新たな問題が生じた面もある。本書が描く世界史の全体像や、その中で各章の位置づけが分かりにくくなったこともその一つだ。前作は、19世紀の欧米を中心に、「移民」と「国民国家形成」を全体のテーマとして扱っていた。このテーマが世界史全体の中で持つ意味は「はじめに」で説明され、各章は同じテーマをそれぞれ別の側面から見るといふ構成だった。そのため、各章の内容が全体の中にどう位置づけられるのかということは考える必要がなかった。だが、本書が扱う時代や地域は、上述のように非常に広い。共通のテーマも設定されているが、

それは「社会の変化」と曖昧なもので、何のどのような変化を述べるのかは各章で大きく異なっている。そのため、本書が全体でどのような世界史を描こうとしているのか、各章はその全体像の中でどのような位置づけにあるのかが見えにくくなってしまっている。確かに、「はじめに」で世界史の大まかな流れと各章の位置づけは簡単に説明されている。しかし、この説明は、あくまでも各章が扱う内容を中心とした世界史の流れであって、世界の歴史の全体像ではない。もちろん数ページで世界史の流れを網羅することは不可能だ。これを補うためには、各章で扱う時代やその前後の世界がどのような状況にあったか、そしてその中で章の内容はどう位置づけられるのかを詳しく述べる必要がある。それは、この本が示す世界史像を全体で描くということだ。しかし、この点を意識している章は多くない。

これは、いくつかの章が一国史を描くに留まることにも通じる問題である。特定の地域を舞台とする作品から話を展開しようとする、他の地域の状況が無視され、その空間だけで話が閉じて「一国史」的な描写になってしまう。たとえば第3章では、日本を舞台にした作品を扱うが、アジア全体の兵器の技術革新について触れることで、このような状況に陥ることを避けている。だが、同じく日本を舞台にした第11章では、完全に日本国内の話に終始し、世界全体の歴史における位置づけがわからなくなっている。もちろん、ある地域における変化を論じるために、対象となる地域の状況を深く掘り下げる必要があることは理解できる。対象を広く取りすぎると、人々の生活に直結するような小さな出来事が見えなくなる危険があるからだ。だが、「世界史」をタイトルに冠する以上、その限られた地域の出来事が、より広い世界の歴史の中でどのような意味を持つのかを明確に示す必要があるだろう。これは決して不可能なことではない。現状において、他地域との関連が不明なままになっている章においても、本筋ではなく、導入として前後の世界全体の状況を語ることは可能である。本書全体でどのような世界史像を描くのか、各章はそれにどう貢献するのかとい

う点について、もう少し配慮が必要だったのではないか。

本書が「楽しんで読む」ことを目標にしているということはすでに何度も述べた。そのための工夫が「アニメを読み解くことで、そうした世界史に迫るだけでなく、世界史のほうからアニメに接近する」（前作 228 頁）ことだ。前作では「世界名作劇場」シリーズの各作品の原作となった文学を重要な考察対象としていたため、「アニメで読む」と謳いながら実質的には名作文学から世界史を読み解いていた。今作ではアニメオリジナルの作品が増えたことで、「アニメを読み解くことで世界史に迫る」という狙いは前作よりも達成されたと言えるだろう。だが、「世界史のほうからアニメに接近する」ということについては、むしろ後退したように思われる。

アニメ作品から世界史を読み解くというのは難しい。アニメーションの主眼は物語や映像表現にあるのであって、世界史的な要素が見出せそうな設定部分は直接語られないことが多いからだ。この問題を解決するため、前作では文学作品を併用していた。だが、今作は原作小説のない作品や、原作があっても内容はかなり異なる作品が考察対象の大半を占めるため、前作と同じ手段はとることができない。おそらくはそのために、本書では対象とする物語と歴史の説明が乖離している章が散見される。つまり、アニメ作品は導入にすぎず、その背景にあると思いき歴史的事象と作品そのものの関係が明示されないまま、歴史の説明に終始してしまっているのだ。これは、本書の魅力を減じてしまうやり方だ。世界史の側にアニメ作品を一方的に従属させ、世界史がアニメに近づく努力を放棄しているようにも見える。これでは、アニメ作品が好きで本書に興味を持った人々に対し、世界史の面白さを伝えることは難しい。先程は、各章でより大きな歴史の流れを意識すべきだと書いたが、この点については反対に、作品のどの部分がどのような歴史に由来するのか、細かい点を考えるべきだったのではないだろうか。

ところで、本書のテーマは「社会の変化」だが、それに関連して多くの章で「偏見」の問題が触れ

られている。「偏見」ではマイナスの意味が強すぎるというなら、「偏ったイメージ」と言ってもいいかもしれない。「はじめに」では第 7 章と第 8 章に関連してこの点を「オリエンタリズム」として触れているが、他にも複数の章で同様の問題が扱われている。それらの章で描かれるイメージは欧米人の非欧米人に対するものだけではない。中国や中東の人々が他の地域に対し抱くものだったり、同じ地域に暮らす人々が互いに持つものだったりする。作中の登場人物同士の問題として指摘されることもあるが、多いのは、作品の原作者や原作が描かれた時代や地域の人々が抱くものだ。このような、作品に描かれる内容だけでなく、さらにその外側にある人の考え方も意識するという姿勢は、史料批判とも通じる。歴史研究者らしい視点だと言えるだろう。

だが、原作の作者やその人を取り巻く環境への考察が丁寧になされているのに対し、アニメ作品の監督などの製作者や、作品と同時代の状況については、意識されているとは言い難い。本書ではアニメ作品内の表現に関して興味深い指摘は多いが、なぜそうなっているのかという理由はほとんど言及されない。原作との差異についても同様で、少数の例外を除き、どちらも物語上の制約という以上の説明はなされない。過去の偏見に比べ、現在の偏見は軽視されているという印象を受ける。

しかし、偏ったイメージの問題は、現在でも重要だ。第 2 章や第 5 章では、映画作品のテーマソングや作品内の表現そのものに対し批判がなされたことを語っている。ある種の人々に対する偏見は、少なくともこれらの作品が公開された 20 世紀末の時点でも存在しているのだ。これらの偏ったイメージはなぜ生まれ、なぜ現代まで残り、なぜそれが問題なのか。第 1 章では過去の中国人の遊牧民に対する偏見について論じていたが、執筆者の記述を見ると、アニメを製作した現代のアメリカ人も同様のイメージを抱いているようだ。なぜ偏ったイメージが広がるのか。一方、過去から現在へ至る過程で弱まったイメージもある。第 7 章と第 8 章では、19 世紀に書かれた原作で見られたインドやアフリカに対する偏りが、アニメ作

---

品ではほとんど見られないことを指摘している。それは一体なぜなのか。第8章はこの理由を交通手段や情報伝達手段の発達に求めているが、「おわりに」でも言われていたように、情報の入手が容易になればイメージの偏りが自然に修正されるわけではない。なぜこれを積極的に修正しようという気運が生まれたのか。これらの点について、現代のアニメ作品そのものを題材にきちんと論じるべきではなかったか。

アニメ作品の表象に潜む偏見を指摘し論じるのは、歴史研究者の役割を越えているようにも思われるかもしれない。だが、大抵の場合、偏見には歴史的な背景がある。これを克服することは歴史学の役割の一つであり、日本の学生が日本史だけでなく世界史を学ぶ意義なのではないか。だとすれば、現代に存在する偏見を指摘し、その歴史的経緯を明らかにすることは、まさに歴史家の役目だろう。また、本書は世界史を学ぶ受験生も読者として想定している。彼ら／彼女らが、本書で論じられる問題を自分たち自身のものとして受け止められるよう、直接現代につながる形で偏見の問題を語る部分が欲しかった。

以上、本稿では、本書の内容とその趣旨についてまとめると共に、それらに対する評者の意見を述べた。いくつか問題と思われることも挙げたが、本書が世界史の入門書として大きな魅力を持ち、多くの人を惹きつけるものだという事は疑いようがない。「あとがき」の中で、本書は「パブリック・ヒストリ」の一つの形とされていた。このように、学問の成果を研究者以外の人々とも共有する試みは、大学での学問の意味が問い直される現在、ますます重要となっていくことが予想される。

本書で明らかにされたように、世界史はアニメのような日常的に接するものにも隠れている。世界史は現代と関係のない遠い昔の物語ではなく、本当は、アニメのように身近にあふれ、当たり前の存在なのだ。歴史学に直接関わる人も、そうでない人も、多くの人が本書を手に取り、世界史を身近に感じるきっかけとなるよう、心より願っている。

(森下瑠子)

---